崇 詩周頌ニ崇牙樹羽トアリ

（評）此一大勝利ノ重ナル原因ハ蓋シ新機軸ノ戰術ヲ使用シタルニ由ル新機軸ノ戰術トハ何ソ主トシテ銃陣ヲ用ヒタル是ナリ我邦ニ於テ火器ノ戰陣ニ殊功ヲ奏シタル此役ヲ以テ嚆矢トス又曰ク此役ヤ彼ノ短兵接戰以テ奇功ヲ瞬間ニ奏シタル桶峽ノ戰法ト全ク相反ス孫子ノ所謂形人而我無形モノ是乎

ハ。雨之あしのごとく成てつかれよわりて。場をさらず。打死をしけれバ。勝頼も是を御覧して。是非もなき。馬場美濃と。山方三郎兵衛が。打死之うへハ。合戦ハ見へざりと思召處に。其外ことごとく崇之兵(ムネトツハモノ)打死をしたりけれバ。則(スナハチ)亂而(ミダレ)はいぐんする。然共勝頼ハ無何事。引のけさせ給ふ。是寄球(ツイリ)給ふならバ。かい之國迄。おさめさせ給ふべきに。奥平作しゆ(州)。同九八郎を召出給ひ而。今度ハひるいなき城をもち給ふ事。天下にかくれなき。其おぼへもくたい成と。御かん其かへもなし。大久保七郎右衛門。同次右衛門兄弟之者共を召出給ひ而。さてさて今度之むしや(武者)ぶりハ。ひるいなし。汝共(ナンヂ)がかけ引ゆへ。陣にかちたり。汝共程成者を我ハもたぬと被仰而。殊外御かん成。然間其寄引入給へバ。家康を頼而今度之御禮と被成而。わぎちへ御参附(府)有。其時御供之衆ハしらずに。しかうし(伺候)て有所へ。信長立出させ給ひ而。ひげハこぬかと被仰けれバ。其時ゑ原孫三郎が罷出ければ。信長之仰に。いやいやながしのにての。ひげが事と被仰けれバ。七郎右衛門ハ御供にまいらざれバ。大久保次右衛門罷出ければ。其時さて汝が事にて有。さてさてながしのまでの。むしや(武者)まい。手がら云に不及。汝共程の者を我ハもたぬ。今度ハしんろう(辛労)をしさると被仰而。御ふくを被下ければ。次右衛門ハ時のめんぼく(面目)などとして罷立。家康其寄御歸被成而。同亥の年。二俣(フタマタ)へ押寄(オシヨセ)させ給ひて。むしやもんどう。とバ山。見な原。ひさが島に。取出を被成給ふ。二俣を大久保七郎右衛門に被下候ゆへ。ミな原之取出に有。然處に。高明の城へ押寄させ給ふ。大手の二王どうぐちへ。本田平八。榊原小平太。其外押寄たり。御旗本(ハタ)ハ横河(ヨコ)ならつらせ給ひて。かゞ見山へ押上させ給ひ。其寄城へ璨(ツイル)程に。城にハ。おさいなの又太郎が有けるが。かうさんをこひければ。命をたすけてやり給ふ。同年二俣を落城成」

然る處に。天正四年七月日。ゐぬいへ御もたるた有而。たる山の城を責取。其寄かつさうへ押寄給へバ。しかを坂をもちて入立ざれバ。大久保七郎右衛門に。石が嶺(ミネ)へあがりて。かさ寄をおひくぼせ(追崩)と御意之候へバ。おうけ申而。七郎右衛門。石きりへのぼりけれバ。天野宮内右衛門。かなしと思ひ而。しかさうと。のつさうをわけて。しゝがもなへ。のぼりて引のきけり。大久保七郎右衛門ハ。天正三年乙(キノト)亥寄。同天正九年辛(カノト)巳年迄。二俣。高明。入手をもちて。坂井めに有りて。日夜無隙。山野にふしてかせぎけり。さて又。天正五年丁(ヒノト)丑に。

しゆつけおちハ還俗ヲ云フカ

本會材料ノ第一巻ニイロチノ退ロトアルハ此事ナリ

すはの原の城を責させ給ひ而。頓而責取給ふ。其寄小山之城を。押寄而責させ給ふ處に。勝頼ハ後ぜめと被成而。長しのにて打死の。あとつぎ之十二三寄うへの者。又ハしゆつけおちなどを引つれて。御出馬ありて。そやおゝ井河を。一そあひ二そあひ越られれば。城をまきやぶして。引のき給ふ時。いらうるた迄ハ。敵にむかはせ給ひし程ハ。信康何共不被仰して。のかせられ給ふが。いらうさた寄。敵をあとへなす時ハ。信康之仰にハ。是迄ハ敵にむかひ申されハこそ。御先へハ參るり。是寄ハ敵をあとにして引のき申せむ。先上様。のかせられ給へ。何方より親をあとにおき申而。子の先として。先へのく事の御座可有哉と被仰ければ。大殿之御状にハ。せがれのゆるれざる事を申者哉。とく〳〵のき候らへと。千度百度。押つ。おさへつ。被仰れ共。つゐに信康ハのかせられ給ハねば。大殿之まけさせられて。引のかせ給へば。信康ハ御あとをしづ〳〵と引のかせられ給へば。勝頼を河おバ越給ハず。河を越ぶる者も引取。上様を。すはの原城へいらせ給ひ而。其寄御馬ハ入。丑之年。信康之。御前様寄。信康をさゝへさせ給ひて。十二ヶおやうろき立被成而。坂井左衛門督にもたせ給ひ而。信長へつかハし給ふ。信長左衛門督を引むけて。まき物をひらき給ひ。一々に是ハいかゝと。御たづね候へむ。左衛門督中〳〵存知申と申ければ。又是ハと被仰ければ。其儀を存知申と申ければ。信長十ヶ所ひらき給ひ。一つに御尋有ければ。十ヶ所ながら存知申と申ければ。信長二ヶ所おバ。ひらかせ給ハで。家之おとながとしく存知申故ハ。うたがいなし。此分ならバ。とても物にハ成間敷候間。腹をきらせ給へと。家康へ可被申と仰ければ。左衛門督此由おうけを申而。罷歸時。岡崎へハよらずして。すぐに濱松へとおりければ。御りこん成殿に候へば。頓而御心得被成而。是非に不及と被仰けり。家康へ此由を。左衛門督が申上ければ。此由を聞召而。是非ニ不及次第成。信長に恨ハなし。高きもいやしきも子のかわゆき事ハ同前成に。十ヶ所迄ひらき給ひ而。一〳〵尋給ひしに。しらざる由申候ハゞ。信長もか様にハ仰有間敷を。一つ存知申と申るによつて。か様に被仰成。別之子細にあらず。三郎おバ左衛門督がさゝえしによつて。腹をきらする迄。我も大敵をかゝえて。信長をうしろにあてゝ有故ハ。信長にそむき而成がたければ。是非ニ不及と被仰ける處に。平岩七之助罷出而申けるハ。そうしに。御腹をきらせ申給ひてハ。かならず御後會可被成。然者某を御そばに付奉り候へ

（評）七之ノ語理鑿セリ余ハ惜ム家康ノ之ヲ聴カザルヲ而シテ尚ホ惜ムハ此際七之ノ早ク自カラ處スル所アラザリシヲ

ば。何事をも某之いなぶに被成候へて。某が頭をとらせ給ひて。信長へ急指被上給ば。其時は誰ぞ御頼被成而。家康を獨子にて御座候間。ふびんに可被存と申上候はゞ。其時は信長も。某が頭之參ると聞召給はゞ。儀ぶんのやはらぐ事も可有に。菟角に某が頭を一時もはやく指遣りされ給へと。思ひ入而。重ゝ指遣めく〳〵申上られば。七之助が云處尤成爲こそ候らへ。よつくわんじても見よ。我を國にむゞかる程の獨子を。もちて。殊更我あとを遣がせんと思ひて有に。か樣に先立申さんこと。日本之むしと云。いか斗めいぼくこれにすぎず。然るとは云共。勝頼と云大敵をかゝへて有なれば。信長をうらみあてはべりなござる事なれば。信長にそむきてはならず。其故汝をきりて頭をもたせてなりて。三郎が命さへながらへば。汝が命をもられんずれ共。左衛門督がさゝへの故は。何とぞても成間敷に。汝までなくしては。うへがうへのちじよく成。然者三郎をふびんなれ共。岡崎を出せと仰あつて。岡崎を御出被成而。大濱へ御越有而。其寄りしの城へ御越被成而。又其寄二俣の城へ御越被成而。天方山城と。服部半藏を仰被付而。天正六年戊寅御年廿にて十五日に。御腹を被成たり。何たる御とがもなけれ共。御前樣は。信長

（評）家康ノ才略雄武ヲ以テ終ニ其最愛ノ一子ヲ犧牲ニ供スルヲ免

の御娘にておはしまし給ふ。其故早御姫君を。二人出來させ給へ共。御ふあひにも有遣るが。それとても御子の有中と申。御ふうふの御中なれば。御子の御なめと申。人口と申。方ゝ以ゟ樣に。御さゝへ可有にはあらざる御事なれ共。さりとてはむごき御仕合と申さぬ人はなかりけり。それのみならず。坂井左衛門督は。御家のおとなと申。御譜代久敷御主の候事を。御前樣に見かへ奉りて。御前と一身して。よく〳〵くちを指上而さゝへ奉りけりと。各々上下共に申而。にくミけれ共。信長へおそれをなしてわされはならず。さてもおしき御事かな。これ程の殿は又出がたし。中夜共に武邊之者を。召寄られ給ひ而。武邊の御ぞうたん斗成。其外には御馬と御鷹之御事成。よく〳〵御きやうにも御座候へばこそ御年にもたらせられ給はね共。被仰し御事を後之世迄も。三郎樣之如此被仰しとさなおもそる。人ゝもおしき事とさゝしさり。家康を御子ながらも。御きやうと申。さすが御親之御身にもなせられ給ふ御武邊おば。のこさず御身にもなせられ而。出させ給へば。御をしみ。數々に思召候へ共。其頃信長にしながりせられ而。かなりぬ。御事なれば。是非ニ不及して。御腹を御させ給ふ成。上下ばんみんこれを引而。かなしま

カレス小國ノ大國ニ牵マツル實ニ難哉

ざるハなし信康之御そく女二人おハしまし給ふ成。然間天正五年丁丑ニ勝頼ヨこ寸がへ。御もたふき被成ける。家康ハしむ原へ。出させ給ひて。御陣之とらせらせ給ふ所ニ。勝頼之もふらた給ふ由を聞召而。よこそかへ御旗をよせさせ給ふ。既ニ合戦を有かと見へ々れ共勝頼をかまひをなく引とらせ給へバ。事出来なし。其寄上様をしむ原へ。御引被成而。御陣之とらせ給ひて。勝頼ハまゐりて。懸河之筋へ出るかとて。大久保七郎右衛門と。本田豊後守をバ。久はゐへ指越被成而。陣をとらせ給ふ成。然共勝頼ハ。よこすか寄。引入給ふ成。同年ニ。田中へ御もふらき被成而。とうゐのしふみ御陣之とらせ給ふ。勝頼ハ。きせ河へ出而。ならせやうれ氏政と。合陣をとらせ給ひしが。家康之とうゐのしふニ。御陣を取せ給ふ由を聞召。是ハ家康をしはがへ引入ふり。其儀なふバ。うはの谷おゆきて。田中之城ようはまて。おとを取きり而。一合戦してもふ寸ゐしとて。氏政へはかいを被立。家康山西へもふふきとうゐニ陣取而有由承候間。明日ハ衆元を引もらい候へて。家康へむかひ可申候間。御しふい被成候ハゞ。其御心得有而。御付可有。又合戦を被成ンと思召給ハゞ。尤之御事可仕候と仰被入而。合陣ヲもらい給ひて。きせ河寄藤河へ。押寄給へ

出けれバハ出水ノ事ナラン

よつもらひハ後殿ナリ

●稲ノ苗ヲ薙キ蒐ラシタル也

バ。藤河が。事之外出けれバ。こす事をならざる処ニ。是おバ夢ニも。家康御存知なき所へ。大久保七郎右衛門内ニ。島孫左衛門と申者之おひニ。越後と申出家。付中寄もしまし入而。此由を申上ければ。取あえず引のき給ふ。石川ならきニしつもらひお仰被付けれ。然処ニ。もち舟寄出而付ける処を。とつて跡而。山へおひあげて。とく／＼打取。其時松平岩見。酒井備後などをやめふり。其外ニもあれ共。まづ彼等が事を云ふり。其寄おゝい河を引越而。そゐの原城へいらせ給へど。勝頼をおはつけて。田中之城へうはらせ給へども。をそきゆへ無何事も。其年高天神ニむかゐせ給ひて。大坂山ニ取出を被成けり。おがさの取出と二つなれ共。おがさ山ハ。此前取給ふ。然間天正七年己卯の春。田中へ御もふふき有而。なえをあぎて引給ふ。同年高天神の取出。中村ニ二つ。同しゝがもあ。同あふが坂ニ取出を被成ければ。をがさ。大坂。中村ニ二つ。しゝがもあ。あふが坂。以上六ッ取出をとらせ給ふ。然間天正八年庚辰の。八月寄高天神へ取寄給ひ而。四方ニ。ふかくほろくやりをならせ。たかどいをはき。たか屋いをかけ。同庵いニハ。付もがりをゆひ。ありむかひニハ。七重八重ニ大ざくを付させ。一間ニ侍一人ぜゝの御手あてを被成。きつても出バ。其

寄子ハ配下ナ云フ
そけハ援助ノコナリ

上よ人をまし給ふ御手だてを被成けれバ。城中寄ハ鳥もかよはぬ計成。うしろよハ。後ぜめのためと被成而。ひろくふかく。大ほりをほらせ給ひ而。城之ごとくに被成けれ共。何としてもまゐり候哉。されバ坂甚太夫と申者が入而。又出ざると申けり。然るどいかやせ共林之谷と申ハ。山高くして。可出様をなし。たとへ出ざると云共。行されハ國中。其外。おがさ。懸河。それの原。南ハ大坂。よこすかよハ上様之御座候へバ。出而行べきかたをなし。然間陣之可取らいをなけれバ。大久保七郎右衛門うけとりなれ共。もるかに色ざいまで。とおくに陣を取。上寄之御状(沙汰)によれバ。とても林之谷へ出る事ハあらじ。然者。時の番之者を六人ぜい指置(サシヲキ)申せと御諚成。然間天正九年辛巳(カノトノ)三月廿二日之夜之四ッ時分に。ふるてよせけてきつて出る。おすけ。尾原。石河長土(門)守(ト)之をちくちハ。いりえ(入江)の様成處なれバ。城寄是を。よせ(留カ)見と見て。きつて出けれバ。間ハなりなれバ。それへとしくかけ入なればバ。三方よせ指とさ見て打ける間。ありいつとい。打ころして。夜明て頭(クビ)をバ取。岡邊丹波と。横田甚五郎者。林之谷へ。大久保七郎右衛門手へ出る。番之者六人指越候へどハ御意なれ共。七郎右衛門ハ大久保平助に相そへて。ことの者を十九騎指越ける。然間。城の

大將にて有ける。岡邊丹波おぢ。平助がたち(太刀)付而。寄子の本田主水に。うたせけり。丹波となのりたらバ。よせ子にハうたせまじけれ共。なのらぬゆへ(故)成。其場にてとしく。五三人ぜいハ打たれ共。せいきもきれて。皆(ミナ)打とめる事ハあらず。然處に。七郎右衛門所より。とやそけてきたりけれ共。とやとおハりぬ。然處に。石河長門守。おすけ。尾原之手にて打もらされ共が。又まつくろに來りて。水野日向守手をやぶりけるが。其時ハ日向守ハ。年若くして。御旗本(ハタ)にはめられて。名代として。水野太郎作と。村越與惣左衛門がいたりしが。出而ふせがず。七郎右衛門とならびなれバ。そけ合之者共。かけきたれバ。ふせぎて。おふかし打取。さて又。天正十年壬午(ミツノエ)之春。木曾。勝頼へ手がはりをして。信長を引たれバ。信長親子ハ馬(トウ)をなし(頭)御出馬有りて。馬とられ城を責取給ふ。勝頼ハ。それへ御出馬有けるが馬(トウ)ホの落城之由を聞召而。すハよりかい之國へ引入給へバ。とや御普代之衆を。としく。おちちり而なかりけれバ。いかゞせんと思召處に。有相(合)衆を御供をせんか。何とせんとてさゝめきけり。こ見山内前(小宮)ハおくにて召はかされやせ共。御意にそむきて有ける。小山田將監を。内前と兩天成が。是ハかはらずしてゆつとう成けるが。勝頼を見すて

奉りて。早落行。其時こし山。弟に申けるハ。我ハ御かんきをかうむると申共。我せんぞ御代〻へ御無沙汰なき筋め之者なれバ。此度御供申而。腹をきる覚ごと申けきバ。弟之又七郎も。我を是非共に御供せんと申せぞ。内前申様ハ。勝頼之御なさけ添なくて御供申におふぞでそ。我がせんぞの御ちうせつ。又ハ御普代之筋めなれバ。祖父。親。先祖の名をくさざるしどのために御供を申成。汝ハ命ながらへて。親をかこち。又ハ我等が女子をかこちて。うむねのうへのむおを。かゝざる様に。頼入成とて。親。又ハ女子を。弟におぼけおきて。勝頼の御前に参。我ハ日比御かんきかうむるとハ申せ共。是非共御供可仕候。御ゆるされ給へ。然どハ申せ共。我等が五しやくにさらざる。身をもちかゐ申さる事之御座候。ぞきをいかおど申み。君之御眼前をちがへしと仕候へバ。我が先祖の御ちうせつ。又ハ御普代之御内之者之かいもなし。又先祖の御ちうせつを立申。御普代之御主様之御用立。御供を申せバ。君之御眼前をちがい申。其をいかおと申上候に。おなしことくに召つかむされ候処に。某おバ。御用おも罷立間敷と思召而。御かんきをかうむらせ給ふ。小山田将監ヰハ。御心をおかれず。御用にもたゝんと思召而。御ひざもとちかく召つかもさき申将監ハ。かけおち仕候処に。又御用にも罷立間敷と思召候内前めが。御さい後に罷出。おそれながら御ちきだんに。御かんどう御しやめん之。御わび事を申上而。御供仕候而。腹をきり申候事ハ。さて日比の御眼まきハちがい。不申哉。然共先祖の御ちうせつヲ立。御普代之。御主様之。御さい後の。御供でそ。何よりをつて。目出度とて。御供をこそしさりけり。扨又。竹田之梅説を。勝頼之ためにハ。姉婿にて有りけるが。付中寄。御前をぬすミ出して。下山へ引のけ給ひ而。勝頼にぎやくしんをし給へバ。いよ〳〵何きをも。勝頼をそてゝかけおちをしさり。家康ハ駿河寄もいふせ給へバ。田中之城を。に田右衛門督がをつ。まぢこの城を。なしろ左衛門がをつ。とうなの城おバ。あさいながもつ。久のゝ城をバ。寄合にをつ。おな山ハ。御味方に成さるとハ申せ共。未なぎり之城をもちてゐさる間。此城〻をおさめて。上原にて。おな山とたいめん有りて。おな山を押立給ひて。市河へ御付有而御陣取せ給へバ。信長ハそもに。御陣之取せ給へバ。先手ハ新付に付。家康ハ道〳〵之城〻に御隙をつくし給ふ。それのミならず。道之程を。ぎふと。濱松を。くらぶれバ。濱松からハ。三日やどを。とおからんに寄而。すこしおそくいふせ給ふ成。勝頼ハ

（評）國ヲ立ツル數世、士ヲ養フ幾十年、何ゾ將監ノ多クシテ内膳ノ寡キヤ、武田氏獨リ其祀ヲ絶ツモ亦宜ナラスヤ

早とく〱。御内之衆をちりぐ〱に。主をすてゝかけおちをしたりけれバ。纔五十騎三十騎之ていにならせ給ひて。新付を。天正十年壬午三月三日に御前を引はれさせ給ひ而。ぐんないの小山田方へ。御越有らんとて。小山田八左衛門と云者を。先様指はかりせ給へバ。小山田を心がはりをして。よせ奉らざれバ。八左衛門を歸りこず。其寄只今迄。御供したる者供を。ちり〱に成而。早五騎十騎之手いにならせ給ひ而。てんもく山へ。入せ給はんと被成けれバ。てんもく山へは。御普代久敷あまり甚五郎と。大くま新右衛門が。むこしうと先に入而手がはりをして。矢てつぽうを出して。いかけ。打かけけれバ。かなはせ給はで。御前。御ぞうし供に。かはらにしきがはを。しかせて。やぞらはせ給ひける處に。あとより程なく。敵がおひかけけれバ。土屋惣藏。指むかひける所に。跡邊尾張守は。爰をすてゝをちゆくを。惣藏是を見て。尾張は今にいたつて。何方へおちゆくぞとて。よびかけて。ごあしけれバ。尾張をうんやはきけん。土屋が矢が。そしりはさつて。まつたゞなかをいとをしけれバ。馬よりおちたる所へ。をちけれバ。よせくる者が。即頭を取。とてものよみぢならバ。花〲と勝頼之御供をするならバ。土屋同前に。其名をあげて。名をかうたいに。のこすべきを。おあしよみぢと申ながら。普代之主のせんどをすつして。其場をかけおちして。土屋にいころされ申事を。にくまぬ者はなし。土屋はこゝ寄矢たむねとゐて。押見ざし。さし取引はめ。さん〲にいてまはり。おゝくの敵をやろぶして。とつて歸。御前と。御そぞの女房立に。御いとまをまいらせ給ひ而。勝頼と御ざうしの。御かいしやく申而。其身を腹十文字にきりて。しでの御供申さる。土屋惣藏が有様。せうこをいまも有がたしと。やめぬ者はなし。其後に勝頼。御親子之御しるしを。信長之御目にかけけれバ。信長御らんじて。日本にかくれなき。弓取なれ共。うんがはきさせ給ひて。かくならせ給ふ物のなと被仰たり。さて信長は。國のしおきと被成而。上野おバ。竹河伊豫守に被下。かい之國おバ。河しり與兵衛に被下。駿河おバ家康へはかはされて。ふじ一見と被仰而。女坂。かしは坂を。こゑさせ給ひ而。駿河へ御出有而。ふかさを。とをらせ給ひ。遠江三河へ出させらせて。御歸國成。然間家康を。今度之御禮と被成。あはちへ御座被成候。信長は。家康と打はせ。都のぼらせ給ふ。信長之仰には。家康はさかいへ御越有而。さかいをけんぶつ被成候へよと。仰けるによつて。さかいへ。御越被成ける。

お覧ハ上卷お千代椽ト同筆法ナラン

かけもあはせずハ間ニ合ハズノ意ナラン

然處に。あけち日向守ハ。信長之取立之者にて有けるが。丹波を給はりて有しが。にはかにぎやくしんをくはだ立。丹波寄夜ばめにして。本のふ寺へ押寄而。信長に御腹をさせ申。信長を出させ給ひ而。上之助が爲つしんかと被仰られば。森之お覧が申。あけちが爲つしんかと見へ申と申せば。さてハあけちめが。心がはりかと。被仰候處を。あけちがろうどうが參りて。一鑓つき奉れば。其寄おくへ引入給ふ。お覧ハつきて出而。ひるいなくしあふた而。打死をして御供を申。早火をかけて。信長ハ。やけしに給ふ。小田之九右衛門ふくぞ見とも。もしめとしてかけけるが。かけをあはせずして。かなはざれば。上之助殿へこもる。野村三十郎ハ。こもる事ならざれば。おひばらをきる。然處に。信長に御腹をさせ申而。又上之助殿へ。押寄ける。小田之九右衛門。ふくばうをとしめとして。こゝはの者共。百余こもりけるば。上之助殿にてハ火花をちらしてたゝかひて。上之介殿をとしめまいらせ而。ことごとく打しにをしたり。小田之源五殿と。山之内修理ハ。さまをくゞり。其寄小田之うらくに成。家康ハ此由をさかいにて。聞召れば。早都へ御越ハならせられ給はで。伊賀之國へ。かゝらせ給ひ而。のかせられ給ふ。然處に。信長。伊賀之國をきりとらせ給ひて。なできりにして。國々へをちちりたる者迄を。引寄々々御せいばいを被成ける時。三河へおち來りて。家康を奉頼たる者を。一人も御せいばいなくして。御ふち被成ける間。國に打もらされて有者が。忝奉存而。此時御をんをおくり申さではとて。をくり奉る成。なか山梅説ハ。家康をしたがひ奉りて。御あとにさがりて。おとしましける間。物取共が。打ころ寸。家康へ付奉りて。のき給はゞ。何のさおいを有間敷に。付奉らせ給はざるこそ浮雲成。伊賀地を出させ給ひて。しろこ寄。御舟に召而。大野へあがらせ給ふ由聞へて。各々御むかひに參而岡崎へ供申。其寄本田百介ハ。河しり與兵衛とちいん之事なれば。いそぎ參而。其元に一騎をおこる物ならば。御かせい可被成と。仰つかはされたれば。河しりを。忝なきと申せ共。百介ハ一騎をおこして。我等を打可申とて來りたると。思ひて。ちそうして。其後かやをはりて。ふさせて。河しりハ長刀をもつて。來りて。かな之はりてをきつておとして。其儘つきころしければ。一騎共此由聞寄も。四方寄押寄而。河しりをも打ころ寸。然處に。大すか五郎左衛門と。岡アの次郎右衛門。なか山内之者共を指つかはし給へば。なか山衆と。岡ア次郎右衛門ハ。古府中へ付。大まか五郎右衛門ハ。市河

に居たり。然共。度々彼方一騎共にて。しばまらざる所成。大久保七郎右衛門。婆口へ付たる由を。五郎左衛門を聞而。さてハ七郎右衛門が付たるが。今ハ心安とて。おふいきをはきける處に。石河長土。本田豊後親子を。付たるとやけれバ。大方一騎をしばまりけり。然間。大すり五郎左。大久保七郎右衛門。本田豊後親子。石河長度。岡ア次郎右衛門。おな山衆。若兄て迄。押出す。然る處に。七郎右衛門方迄。六河衆おびはが衆。りけよせ而。先がけをそる。然る間。御出馬。程ちりけれバ。此五六手之衆ハそこへ押寄ける。大久保七郎右衛門さいかくにて。そこおを引付たり。いなへハ大草と。ちくを。是を七郎右衛門が御意を得而。本領ヲ出し而引付たり。然間。下ぢやうをも。七郎右衛門が引付たり。よび右衛門ハ。二俣之城を。七郎右衛門に渡しける。其ゆひせうをもつて。田中之城おを。大久保七郎右衛門にもたさんと申而。七郎右衛門に渡して。信濃へ行たるが。信濃を兄ざれて早其儀をならずして。両度之ちなミをもつて七郎右衛門を頼而。二俣へおちりくれ而。来るを。七郎右衛門が。此由を御意をうけけれバ。信長へかくしておくべき由。御意に候へバ。二俣にかくしおく。七郎右衛門申上けるハ。此時御用に罷可立候へバ。よだ右衛門に本

多々チコトい謂マスルヿ白氏文集ニ見ユ

領を被下候へ而。指被越候ハゞ。普代之者共を。不殘罷可出候間。是寄も所手寄も。五騎十騎ばゝ相くそへらせ。甲州せんやうを相そへらせて。其故しむる七九郎を。御かんきをりうむり而。罷在儀に御座候へバ。此度御ゆるされ被成而。此者共のせうに被成而。指被越候ハゞ。作之郡ハさおひなく御手に可入。其故よき小屋をもち申はるが。其小屋に普代之者共。罷有由申と申上たれバ。尤之儀成。其儀ならバ。七九郎を相そへ。所而よせも。出合而早〻越候へと。御意に候へど若兄て寄。指越けせバ。即小屋へ入けせ者。普代之者ハ夢之多地して。悦而小屋をりたくもは。然る處に。北條ノ氏なをハ。かんな河にて。竹河伊豫守と。合戰して打勝而。信濃ノ。うすいとうげを越而。作く郡へ出けせバ。頓而さなぐ安房守を。氏なをの御手に付。然間坂井左衛門督ハ。東三河之國衆を。引つせ而。三千斗にて。伊な郡へ出而。そこへ来り而。被申けるハ。信濃おバ。我等に被下候へバ。そこおを。我手はけんと。云たせバ。其時そハ。きをちがへて。其儀ならバ。家康へハ。付申間敷。然バ氏なおへ可付とて。手ぎれをして。氏なをへ。申はかそしけせバ。氏なをハ。此由聞召而。なしたる小屋へあて〻。其寄しんのぎやうしやへ出而。かぢり原に陣取。坂井左衛門督。三千

斗にて。そこをのき而。おつてはに陣之取。同大須賀五郎左衛門。大久保七郎右衛門。石河長門守。本田豊後親子。岡ア次郎右衛門。かな山衆。是をおつてはに陣之取而有けるが。氏なを。道一理の内外に。四萬三千にて。陣取給ふを。夢にもしらずして。有ける處に。七郎右衛門者に石上菟角と云者。かしこの小屋寄。氏なをのそこへ出馬有けるが。おつてはに陣取衆之儀。心元なきとて。八ッがさけを。しのび而來りて。申たるは。氏なおはうちが原に。四萬三千之人數にて陣取而。纔是寄。市理の内外可有に。御存知有而。御入候哉と。菟角が申ければ。其儀ならば。見せに可越とて。其時おつてはの名主。太郎左衛門と申者。七郎右衛門が陣場に有而。何かの指引を申付而。おさゝる事なれば。所之者之事なれば。太郎左衛門を申付而。見せに遣かしければ。太郎左衛門罷歸而申。むかひの原之。しげ見之かげにまん〳〵と陣取而有。明日は定而是へ押寄可申かと。申ければ。其儀ならば。さふらのけやと。各々申ける處に。そこにて。七郎左衛門が申けるは。それを引付而。御味方申處を。左衛門督殿。口さきをもつて。二度敵になさるると申而。左衛門督殿と。七郎右衛門と。もんどうをしさりける。故をもつて。坂井左衛門督殿は。七郎右先のき給へ。七郎右門之のき給はずは。我はのく間敷と被申候。七郎右は。左衛門督のき給へ。左衛門督殿のき給はずは。何と有而も。のく間敷と申さふらふつていさりけるに。敵はさこを越而。我おとふしと。むかひの原へ押上られ共。此をんとうがしてざれば。さらむとて。左衛門督殿のき給ふ。左衛門督殿を。此をんとうにしらを立而。四ッ之比のき給ひしに。陣場に火をかけ而。陣ぞふいをし給へば。敵は此由を見るよりも。むやめて押出ス。左衛門督殿は。其寄をわともみえずして。のきそらい給ふ。然處に。しめ寄。一手におしさる事なれば。六手の衆は。一度にのくしづそらいが。岡ア次郎右衛門。二の手が。かな山衆。三が大久保七郎右衛門。四が本田豊後親子。五が石河長度守。六が大そう五郎左衛門。是六手が。一所に成て。五郎左衛門を先に押立。だん〳〵に押而のきける所に。氏なをは四萬三千之人數にて。かさ成道を。押而敵を見くゞして。先をもぎらんと趲。六手之衆は。漸々取集而。雜兵三千之内外にて。敵をかさに見上而。無洞天引のけたる處に。早頓而。先を取きらんと。しさりける處に。六手が一度に立とゞまりて。旗を押立而趲ければ。敵を歸され而。徐啣而見へたれば。猶趲而。あしがるを出し。てつぽうを打かけて。其きをひに。酷ぞ

啣ハ呷カ呷カ哻カ不明ナレ共蓋シ呻アクビヨリ來ル誤ナランカ

して。禪引のきけをバ。敵をしらして。見へける間。そこを十町斗引のけて。又旗を立而。敵を相待けるていに。いさし候へバ。敵も脇へまはすと。見へける處へ。早石河やうき守をもしめとして。其外之衆。かけ來りけれバ。坂井左衛門督を。押とゞまる。然間氏なをも。其寄若見こへ押而。陣之取給へバ。各々ハ新付へ入而陣之。取られバ。相陣に成。然間六手之大將衆。心おくれ之衆ならバ。さいぐんをせで。かなはざる事なれ共。各々度々之事に。合付さる人々の事成。其故三千之人數が。千斗ハ度々のかうめう。なをあらはしさる。こゝハの者共なれバ。十萬騎。廿萬騎にてよせくると云共。一合戰はゞ。花々とせずしてハ。六手ながら。おくましきそなひに候へバ。四萬三千之人數をもつて。纔三千之内外之者が。七理之道をはかれて。人を一人打せずして。引のく事ハ。せうこを今を有がさし。然る處に。家康ハ。古付中ニ御座被成候はるが。明之日ハ。早新付中へ。うはらせ給ひけり。然とハ申せ共。家康之うはらせ給へ共。御人數ハ。八千寄外ハ無之と申せ共。日夜之たゝかひにを。四萬三千之敵に。一度をはられ。出させ給ハず。然者氏なお仰けるハ。是寄古付中を押而。ぐんないへ入而引取ふんと仰ける由を。家康聞召而。其儀ならバ。むかいの原

御てんぎやうハ御判行ナリ

に。取出を取而。氏なお押而。とおらバ。取出へ人數をうはして。合戰を可被成とて。若見こにを。むかい之原。新付にを。むかい之原に。取出を被成けり。其日かきあげ斗被成而。夕さりハ。松平上野者と。大久保七郎右衛門者を。指越而。大事之番にて有間。ゆだん仕なと被仰越られバ。松平上野殿寄ハ。松平孫三郎を指越給ふ。七郎右衛門方よりハ。大久保平助を指はかはしける。次之日ハ。御ふしんおも定ぬに被成而。其寄ハしよ手よりを。一日。一夜がはりに。番をしさり。然間大久保七郎右衛門方より。おしさ方へ申越而。何とぞさいかくをめぐらして。さなぐを引付給へと。申越候へど。おしさが。さいかくしさり。然共家康御前之。さいかくをよく被成而。さなだ安房守方へ。具に被仰越候へと。おしさ方より申越に付而。御てんぎやうを取。七郎右衛門方よりを。くはしき事。杉浦久藏に申きかせて。久藏をしのび而。はかはしけれバ。安房守ハ。即。御手に入られバ。おしさの小屋へを。ひやうろう米をいれり。此比は小屋を。ひやうらう米にはまりは而。牛馬をくい而。命をはぎける處に。さなだにはゞけらを而。命ながらへさり。然處に。さなだと。おしさと。一手に成而。うそいを取きらんとしけれバ。氏なおめはかとや。氏まさも思召が。舍弟

之。やうぢやう之左衛門助殿を仰ら付る。一萬余にて。ぐんないへ出。見坂を越而。東郡へ打出。此方彼方に打ちまて。やう火して。らんばうをして。そないみだしける。然所に。鳥居彦右衛門と。見やけ惣右衛門と。伯父姪おば。古付中之御留守いに。おりせらを給ひけるが。此由を聞寄。急かけ付たれバ。おとろきさわぎたる處へ。押寄〱打たれバ。と〱くそいぐんして。見坂を指而。にげ行たれバ。左衛門之助殿を。から〱の命たすかり給ひて。見坂を指而。おちゆき給ふ。然間彦右衛門。惣右衛門。兩人之手がら言に不及。さて頭を雑兵五百余。新付中へはけて越たれバ。物見場にかけさせ給へバ。敵方是を見て。何事をするやらん。寄合而。そしまゝまいりあまくとて。見ける處に。頭をかけて。立のきけをバ。敵方いそぎ來りて。見て歸り。氏なをに申上けるハ。何頭やらんと〱敗。かけて見へ申と。申上けをバ。何頭にて有ぞ。見て可參由被仰たれバ。各々來り而見て。是ハ我が親。是ハ我があに。おひ。いとこ。是ハ我がおぢ。あに。おとゝと申而。けうをさまして頭を。だきかゝへて。なきさけぶ。氏なをも。いよ〱是に。おどろき給ひ而。其儀ならバ。ぶちをはくりて。合互に引のけ然しとて。ぶちをぞはくり給ふ。然る間ぐんないと。作之郡を渡し

（評）取レハ之ヲ得、取ラザレハ之ヲ得ズ、之ヲ取ル何ニ在ル兵力ニ在リ是レ戦國ノ常勢況ンヤ無主ノ甲信ニ於テヲヤ

可申候間。然者ぬまたを。此方へ御歸しあつて。御ぶぢに被成候へと。仰たれバ。其儀においてハ。尤可然と被仰候ふいで。頓而御ぶぢに成而。まづぐんないを。渡し給ひ而。其故氏なおハ。のぼ山にかゝらせ給ひ而。作之郡へ出させ給ひ。うそいがとうげを越而。上野へ出させ給ひ而。引入給ふ。家康を。かい之國を。おさめさせ給ひ而。其寄。大久保七郎右衛門を仰被付而。作之郡へ召はかまされ而。御馬ハ入。七郎右衛門ハ御うけ申而。午之九月新付を立而。かぢが原にて。もまへはかいを立而。もまを引付而。しんのぎやうしやへ出而。其寄。おしさの小屋へゆきたれバ。早。野ざハの城を明。前山之城ヲやきはらいて。のきける所。其城へうはりて有に。四方に一理二理之內に。小城。屋敷城共ニ十二三有。こむろ之城。祢はでな。もぢはきのあなて屋。內山之城。ゆまをの城。見ゝ取之城。かしまぎの城。ならむられ城。田之口之城。ゆまむらだ之城。う見の口。平尾之屋敷城。あらこの屋敷城。此城〻の中へまり入而。四方へ取合而。其內に此方彼方を引付たり。まつ岩村を引付而寄。午之年之內に。大方引付而。未之年。よだ右衛門ハ。岩尾之城を。のま取んとて。押寄而のま入處に。右衛門ハてつやうにあたり而打死しける。舍弟之源八郎を。てつや

●御本上トハ信雄ヲ敬ミイヘル稱ナルベシ

かにあたり而してけり。兄弟打死をしたりけれバ。其儘引のく。然共敵に。しるしハ取られず。又七郎右衛門が。未之年とく〳〵。城共を取おさめて。天正十二年甲申之春。上田之城を。七郎右衛門が取而。さおざにしたる寸」

然る處に。同天正十二年甲申之年。くわんばく殿。御本上に。腹をきらせ給ハんと被成ける間。其時御本上。家康を奉頼と。被仰候に付而。尤之儀成。是非共に。見はぎ可申。さてくわんばく殿ハ。むごき事仰候物かな。しだいが三七殿を引申されバ。しだいと。しぼがるけにて。合戰して。しだいをたやして。又三七殿を。ぬまの。うはミに。おハしま寸處に。げんざいの主成を。昔之。おさだに。しがはずして。三七殿を。ぬまのうはミにて打奉り。本上おバ。くわんむく殿のもりたてんと被申て。又世をしばまるかとおもへバ。本上に腹をきらせ申と手。是非に。見はぎ申さんと仰られバ。早くわんむく殿。十萬余騎引はし而。かはまを越而。犬山へ押出て。こまき山を。とらんとし給ふ處に。家康もやくかけ付させ給ひ而。こまき山へあがらせ給へバ。くわんむくを手をうしない給ひて。おぐち。がくでんに。しよせいハ陣取而。一おやう斗に高土手をほきて。其内に陣取成。こまき山にハ。さくおさへ。付させ給ハずして。かけもあちに。陣取せ給ふ。土手のきはまで。かけ付くして。十萬余之人數に。はらを出させ給ハず。然る處に。岡崎へ押寄而。城を取物ならバ。こまき山をも。たもは事成間敷とて。見吉之孫七郎殿を大將として。池田將入。森之庄藏。もせ河藤五郎。ほりの久太郎。其外三萬余にて。天正十二年甲申卯月八日に。おぐち。がくでんヲ立而。岩崎へ出而。一時之内に。岩崎城を責取而。かち時をはくりて有ける處に。家康ハ三河へ。敵がまはると聞召而。其儀ならバ。人數をはかはさんと被仰而。水野惣兵衛殿。榊原式部太夫。大そう五郎右衛門。本田豐後守親子。其外を指はかはされたる處に。程なく見吉孫七郎殿に。押寄而。合戰をしてきりくばし。岩崎を指而。おひ打に打。然處にほりの久太郎。もせ河藤五郎。岩崎之城を責取而。きおひていたる處へ。おひかけられバ。ちりぐ〳〵に亂而。おひける處を。又其寄。おひかへされて。おもたる迄うたれける。然る處に。小牧山にハ。本上と坂井左衛門督。石河ほうき守。本多中務。其外之衆を。留スゐに置せられ給ひ而。家康ハ御旗本衆。井伊兵部せう斗。以上雑兵三千余にて。跡寄。押はめさせ給ふ處に。とく。おもたるを指而。にげ入を御覧して。押よせさせ給ふ處へ。池田將入と。森

庄藏と。押立而家康へむかひける處に。押合而之合戰成。其時に。平松金次郎と。島居金次郎と。二人の鑓が相而。程なくせんぐんして。池田將入なれバ。長井右近が。打取。森庄藏ハ。本田八藏が。打さるといへ共。儀定せず。其寄を。三萬余之者共を。きりくずし給ひ而。とく〳〵とおひ打に打取給ひ。いそぎ人數を引上而。おださの城へ引いらせ給ふ處に。くまんだく殿。おぐはち(小口ノ誤カ)がくでんにて。此由聞召而。いそぎりうせん寺迄押出し給へ共。家康御目の。きかせらるゝ御武邊。第一の名大將なれバ。其むねを。思召さる間。きり〳〵と。とりまはして。手ばやく。おださ城へ。引いらせ給へバ。くまんだく殿も。手をうしなひ給ふ。然處に。小牧山に相殘。坂井左衛門督ナけるハ。くまんだく殿押而。被出けるバ。おださ筋之儀を。心元なく存ぜれ。是寄ふさなやりを押やぶり而。とく〳〵陣屋に火をかけて。やきはらふ物ならバ。くまんだく殿も。たいぐん可有と踏給へ共。其比寄。石川はうき守ハ。くまんだく殿へ心之有間。其儀不可然とて。はうき守一なんに踏ざれバ。左衛門督ハ。手にあせをにぎつて。なからなをかきて。いかゞ共。はうき守そゝまざれバ。打おきぬ。本田中務も。左衛門督と同意なれバ。はうき守そゝまぬと見。さらバ我等ハおださなる。御むかひに參らんとて。五百斗にて。くまんだく殿之そなひ之下を。押而とをり。おださの城へゆきて。御供をナ而。小牧山へ來る。敵味方共に。本田中務をはめさり。然間くまんだく殿も。おぐち。がくでんへ。引入給ふ。然る處に。おぐち。がくでんを。引はらつて。そのまゝを越而。いもふへまからき給ふ。家康ハ。しげん寺へ押出し給ひ而。其寄きよすへ御馬が入。くまんだく殿ハいをふ之城を。水せめに。せめさせ給ふ内に。かになの城にて。前田與七郎が。ないつしん之して。竹河を引入ける處に。家康此由聞召而。ぢてくうはしてかなふ間敷と仰あつて。其儘取あへさせ給ハずして。うけ出させ給へバ。我をとらじと。かけける程に。かにへと下ハ。しや之。さし引の。處なれバ。はそ道一寸しるにて。はきへゆくなきやうをあけ共。家康之御いきおい。一ッをもつて。即程なくのり付かる。竹河を。うなはしと思日而。城之内寄。舟にのり而。かふ〳〵の命。さぞかり而。な口を指而。にげゆく。前田與七郎を。一てなし。てなし而見てあれ共。はよくせめふれ而。かなはトと思ゐ。女子を一舟に打のせ而。江口を指而。にげゆけ共。のがすなきやうにあらずして。な口にて女房子共。もろともに。のこらず打ころされて。しやにうかび而ぞ。有ける

さて又。くはんむく殿ハ。いもふ之城を水せめにして。其寄いせへまはり。くはなれ上成
山ニ陣取給ふ所に。家康ハきよす寄。くはなへうつらせ給ひ而。松が島へ。服部半藏を指
つかはされ而。しろこへ出させ給ひ。濱田と四ヶ市場ニ。城をとらせ給ひ而引入給ふ。く
はんむく殿を。其寄引入給ふ。然間。氏なをを合陣之時之。御ぶぢのきりくミに。氏なをより
ハ。ぐんないと。作之郡。そはぐんを渡し可申とて。是を渡しける。家康寄ハ。ぬまたを。御
渡し候へと御定に付而。氏なを寄ハ。御やくそくのとをりに。渡り申に付而。然者。ぬまた
を小田原へ。渡し申せと仰被越候時。さなだ申けるハ。ぬまた之儀ハ。上寄を被下ず。我等
が手がらをもつて。取奉ぬまた成。其故今度御ちうせつと申に付而。其御約束被成候。筋
めの儀も御座候處に。其儀にさへ御手付を無御座候へバ。御恨に奉存候處に。贐　我等
がもちたる。ぬまたを渡せと。仰被越候儀。なかく思ひもよらずとて。渡し不申。其故御
主にハ仕間敷とて。くはんむく殿へ申よる。然處に天正十三年乙酉之八月ニ。さなだへ。
御人數をさしつかはされける。鳥居彦右衛門。平岩主斗。大久保七郎右衛門。そはかうは。しば
た七九郎。やしなだん正親子。しもでやう。ちく。遠山。大草。甲州せんやう之衆。かした。岡
部次郎右衛門。さんぐさ平右衛門。やしろ越中是等を指つかはされけれバ。上田之城へ
押寄。二の丸迄亂入ける間。火をかけんとせし處に。しばた七九郎かけよせて。火をかけ
たふむ。入たる者共出る事成がたし。火をかくる事むやくとて。とめけるハ。七九郎若げ
のいたりか。物に合付ざるゆへか。火をかけずしてかなはざる處之。火をやめけり。然間
其元を引のけ申時。かんのごとく。火をかけて。やき立ル物なれバ。出間敷敵なれ共。火を
かけざる故に。城寄しないて出る。早しきりに付。各々寄弓てつやうをあとへさげたる
に。大久保七郎右衛門内本田主水。平岩主斗内之尾崎佐門に申けるハ。佐門何としたる
ぞ。其元之樣子殊外。そないが。もめて見ゆるハ。いかゞ成と申時。佐門こたへていはく。
主水よく見たり。只今迄ハ。昔之てつやう之者共が。有つる間。よく心得而。人之云事なを
き〻候へバ。げぢをもなして。そないをさたまりて。もめず。其者共ハ。朝寄やらをくづさ
てかけ引したりけれバ。只今西東をしらざる。物に合付たる事をなき者共を。かたりに
越たれバ。おはてふためたて。げぢを云にも。みゝにも不入して。事おか敷なせてたる事
に候へバ。げぢにを付不申候間。爰元之儀ハ。其方などえらせ候之分に候へバ。只今にげ

ちま可ヵ間。佐門ハ是ゐて打死を可仕候間。若其方之命あがらへ而。引のき給ハヾ。佐門がヵたる由。主斗ぇよくかゝまてくれよと。云もてざるぇ。もやもいぐん去ゝりけをバ。佐門ハとゞのとく。場をさらず去て。打死を去ゝり。鳥居彦右之者共ハ。一段高き所を引のきけるぇ。戸石之城寄出而付。是をきゝ〳〵と付ゟれバ。早。あらざる間。こえ孫七郎が。人ぇすぐれてもえり出。鑓(ヤリ)をくり出し。ゐざくるまぇのせてゐゝる處へ。敵おふせい押ゟけけれバ。ゆつゝちて。おふせいの者共と。花〳〵とゆき合而。場をさらず。うたれゟれバ。其寄彦右の衆ハ。もいぐん去ゝり。七郎右衛門者ハ。乙ア豆吉。本田主水両人弓。くろやあぎ孫左衛門てつやうゐて。押合而のきける。此外ぇも十二三人可有けを共。跡ぇハ此者共が。のきけるぇ。乙ア豆吉が。一之矢をもあえて。いもづえ(射外)。二の矢をゆがれんと去ゝりける處を。早ゆき(突)ふせぐ打處を。くろやあぎ孫左衛門が。立もゞかりて。てつやうぇて豆吉を。打者をもおしてのきけをバ。それよりと〳〵ともいぐん去て。去よて(諸手)之衆四五町之内ぇて。三百余打をける。大久保七郎右衛門ハ。賀ゞ河迄引のきけるが。鳥居彦右衛門者共が。くばれて來るを見て。其方へむゟひ而。一騎歸しける間。其付而大久保平助

衔ハ縮文道字トアリ衍ハ衍ノ誤カ
八幡ハ誓言ナリ
三ツまきハ三ツ巻ニテ刀ノ鞘ヒキハダ皺文ニ附ケシ印ナリ

馬寄とつでおりて。やりをゐつさげ而歸しゟる。七郎右衛門ハ。金れあげ羽之てうれ(蝶)羽のさし物ゐて。かけまゞりけをバ。さし物を見て。頓く旗をを押寄ける。ぇげちる者をうけよせ而。うれふ(河原)ぇこゝへける。平助ハ銀之あげ羽之てうれ(蝶)羽之九去やく(尺)有さし物をさ去て。むゟひける處へ。くろきぐそく(具足)をきて。やりをもちて押こ(込)見て來る者を。ゆきふせ而。頭おバとふず去て。よせくる敵をまちゟけいゝる處へ。さし物を見ゟけて。松平十郎右衛門來る。次ニ足達(アダチ)善一郎來る。次ニ木之下もやと(伴人)が來る。其寄太田源藏。松井彌四郎。天野小八郎。とゆう(戸塚)久助。後藤惣平。けゝ甚六郎。ゑざゟも(茂)助。天がゝ喜三郎是等が。平助いゝる處へ來りたれバ。是等を引ゆれて。上のだいへ押上けるぇ。敵をふせ(防)ぎけるが。と共せず去て。押上ける處ぇ。めてハさあだが旗本(ハタ)。弓手とむゟふハ五間六間之内ぇ。と〳〵く敵が。むゟへていゝる處ぇ。さあゞが内之。きき五右衛門が。弓手之方寄。此者共があらびいゝる中を敵と去らで衔處(トヲル)を。平助が見て。それハ。三ッまきをせざるハ敵ゐて有ぞ。それゆきおとせと云ければ。八幡きき五右衛門ぇて有ぞ。敵ぇハあらざるとヵゟれバ。平助云。きき五右衛門と云ゐ。ゆきおとせと言時。足達善一郎が。もえまかゝまて。

おやへと心得而ハ辱レト心得ノヿナリ

はきけるが。くらればとまへ。わさる。五右衛門か。共に來る者が。やりを取なおして。善一郎を少はく。然處に大久保平助前へ來るを。道中と思ひ而はきかれバ。五右衛門に付さる者共が。やりを四五本もちけるが。二三本にて平助がやりを。からみて。なげけれバ。なおして。はかんとする間に打とおる。けさ甚六郎が前へゆきける時。又平助言。甚六郎それはけといひけれバ。もしりかへりてはきけるが。是をおひさはなれ共。ひぢのそばれ之こしひきになさらん。然間なき五右衛門がつれ。河中島衆之。早くそけ來りさりと思ふ。味方と心得て。敵之中をとおりける處に。大久保七郎右衛門弟の平助に。はかれさると云けれバ。平助云ハ。いやく我をはきれはいてあれ共。我がはくやりはまけらせ而。五右衛門にあさらず。けさ甚六郎とて七郎右衛門者が。やりがあさる成。我にはあらずと。言けるが。五右衛門は平助にはられさるといへバ。おやへと心得而云けれ共。平助はかぬと云。然間敵之中へ入而。味方が歸しくるかと見ける處に。十七八成ひふんなが一人。敵としふずして來りけるを。天野小八郎が。はかんとしける處を。平助が見て。せがれにて有ぞ。むごきに。ゆるせとてゆるさせける。今思ひ合候へバ。是等やどよき高名ハ有間敷物をと。平助を若げのいたりにて打せず。坂井與九郎高名を。其時之高名を。は旗本にてハ。くはれくち之高名と云て。世にのくれなきやうに申共。一時之高名にて候はるが。與九郎高名ハ。七郎右衛門旗之立さる處を。しらでかけ入さる者なれバ。味方の中にて打さる高名成。小八郎に平助が無用と云さる場ハ。與九郎高名の場寄。一町程敵之中へ行過。敵の中にての事なれバ。高名をせでさゑ此者共にハ。高名しさる衆之口ハわかざるに思へバ。其時打ヶなきお。然間敵之中にて味方之歸すかと見ける處に。何かハしらず。廿騎斗本道を。石橋之方へ歸してくると見て。平助ハ其寄むかふの敵にむかひ而。歸し來る衆と一手になちんと思ひ而。押て見てゆきける處に。一度に行ける者共ハ。其時ハ一人を來る者なき所に。天方喜三郎斗來る。然間歸し來る馬のりを見てあれバ。一人も見しりさる人なし。其時喜三郎是寄ハゆく間敷ぞ。見しりさる者ハ一人もなし。只今此者共ハくはれなきと申をわへざる處に。我さたにとにげゆく。もとより敵ハ。五六間之内によりへさる事なれバ。やとなくのり付けり。石橋之有ける處にて。天野金太夫と。小笠原越中と。なみきり孫惣と。兩三人が。とゞをかへして申ハ。平助が是をのく程

なり。見すてまじきとて。平助にとゞを孫惣がかけける。見すてまじきと云けれバ。三人ハ馬にのまゝり。平助ハおり立而。かちなれバ。いらざる。おかしき事ないふそと云てのく。大久保七郎右衛門ハ。平岩主計が。そなひへのり入而云けるハ。貴殿之そなひを河を越而。我等がそなひ之あとへ押付給へ。敵之人数之まつまらざる内に。我等がきつてかゝるべきし。然時ンバ。一人をやるまじきと申せバ。中〳〵主計返事もせず。七郎右衛門重而云けるハ。川を越事成間敷とおもハれバ。せめて河之はた迄。そなひおろさせ給へ。我等かゝり可申と申されけれ共。其儀もならざれバ。七郎右衛門もふをさちて。日比其かくご成人なれバ。ちからをなき。あさましき事とて。のり帰し而。又鳥居彦右衛門そなひへ行而申ハ。平岩主計方に。そなひを河之はた迄おろし給へ。然者敵之人数ちり〳〵成内に。我等がきつてかゝらんと云けれ共。ふるいまはりて物をもゆはず。然者彦右之そなひを。我等そなひのあとへ押出し給へ。敵之人数ちり〳〵なりて。まとまらぬ内に。我等きつてかゝらんと云けれ共。鳥居彦右も。ことばをも不出して有けれバ。其儀ならバ河越事おいやとおもハれバ。河之はたまでそなひをおろさせ給へ。我等がきつてかゝるべし。せめてあとをくろめ給へと云けれ共。返事をなけれバ。何もげこにさけをしいるふぜいなれバ。ちからもなし。日比之存分之ごとく成とて立帰り。又やしなのだん正方之そなへへのり入而。其身之そなへを河之はたへおろし給へ。然者敵之まとまらざる内に。我等がきつてかゝるべしと云けれバ。是ハ猶をふるひて返事をなけれバ。あつたら地行かなと云すてゝ帰る處へ。平助がのりむかひ而。河むかひの敵が河をこしたらバ。此ていなりてハどいぐん可有と見へけり。てつぽうを河之はたへ出させ給へと申されバ。七郎右衛門物をいはずして。手をふりけれバ。手をふりてハかなふまじきぞ。ちや〳〵てつぽうを出させ給へと申バ。其時七郎右衛門たまくそりがなきぞと言けれバ。たまくすり之なきとハ何としたる事ぞや。ちや〳〵出させ給へと云けれバ。其時せがれめが何を云。とく〳〵こしがぬけもて〳〵出んと云者一人もなきぞ。こしがぬけたると言へバ。所人之よそ見成に。たまくそりがなきと。云物なるぞと云けれバ。平助も其儀ならバとて。かハらへのり出して帰る。されバ共敵も河を越さずして引入けれバ。相互に引。然間明之日ハ。まゝこの城へもちかかんとて。ちくま河を越而。八重原へ押上たる處なり。さなくバ

この内トハ籠ノ内ナリ

もなかけ而トハ俗ニ云フおまけなつけてト云フ事カ

かきがミハ柿紙ニテ渋紙ヲ云フ

是を見て。うんの丶町へ押出して。八重原之下を一騎打に。手しろばかまで。ささらさら
れば。大久保七郎右衛門が。是を見て。しなさ七九郎をはかいにして。鳥居彦右衛門方と。
平岩主計方へ。申越は。両人之旗を。ちぐま河之はたへ押おろさせ給へ。然者。岡部次郎右
は。若く候へば。よき源七郎と。そこと。我等がむかつて。中を取きりて。給はば原へおひ上
而。一人をもらさず打取べきと申されれ共。両人之衆一ゑんに。そゝ見不申ざれば。七九郎
を手をうしない而立帰り。七郎右衛門に語られれば。如存知左様に可有。然者。河之はたへ。
出させ給ふ事なられば。此山さきまで押出して。あとをくろめ給へ。菟角に我等がかゝ
り可申と。重而申されれば。両人ながら。七九郎ふを出合給はず。七九をさふを立而。此由七
郎右衛門にきかせられれば。七郎右衛門は。この内之鳥を。にがしたりとて。手をうしない
て有たるが。重而又汐越候へ手給候へと申されれば。其時七九郎七郎右衛門に。ともかけ
而申は。どせ〳〵とても。げこに。酒をしいたるごとくに武邊之方を。しいられるとて。し
いたよりもあらざるに。重々千度百度行たれどとて。かきが可付か。天火おはきとてか
きがミをかぶりて。我等にを不出合して。ふせりて有に。いらざる事を被申候物かな。あ

もけゝハ俗ニ物怪ノ幸抔云フ事カ物怪ハ平家物語ニ見ユ

のていに候はゞ。出たり共やくには立まじけれは。やしなだん正親子と。右之両人おば。
有なしにして。其方と我等斗成共。出ば出させ給へと被申られれば。源七郎をやうしやう
成。岡ア内前をやうしやうなれば。汐身と。そこと。我等三人して。そゝむ所におふされ
ば。無是非とて打おきぬ。然る所にまゝこへもさふきて。八重原に陣取られれば。さなども。
押帰して。相陣之取ける。然る處に。岡ア内前之物見番之時。さなご親子。おしがる之中へ
打まじりて。手ぎはくせり合けるが。岡ア内前には。駿河せんやう之。こゝこの者共あま
たわはまりられれば。事共せずしてわひしらいける。其時七郎衛門。又をやてこまでして。鳥
居彦右衛門方と。平岩主計方へ申被越ける。さなご親子。おしがる場へ出而。かけ引をし
たるとみへたり。旅がうにさいこい之處へ。出されば。両人の旗を。我等が陣場迄出させ
給へ。然者内前之手まへは引となされば成間敷候へば。内前を一番にして。其あとへ我
等が押はめて。合戰をするならば。さなご親子おば。とてもあの坂おば。おげ間敷。打可取
と。度どれはかいを立られ共。中〳〵返事をせざれば。日比の事はしりてはあれ共。か程
とはしらずもけがなくとて打返ぬ。岡ア内前斗にても。おひ不被立して。たい〳〵に

（評）眞田ノ善戰天下比ナシ此役ノ如キ徳川軍ノ全敗ト云フモ不可ナシ平助ハ則彦左ノ幼名ナリ自カラ其戰況チ述フ故ニ記事頗ル詳細ナリ

して。有けるに。各々出たるぞ。手に物はもたすまじき。千兵はもとめやすし。一兵(將カ)はもとめがたしとは。今思ひ合たり。二人之心をもつて。少(勝利)をうしなひ給ふ。殊更何をもの手は。よき事に相(會)り。又あしき事に相り。何樣に。此度手におもざる人は一人をおけを共。やしなだん正は。よき事にも。あしき事にも。おもざれば。たぐいなき武者(下戸カ)げことえへたり。然間此衆ふるひまどりたる故に。いよいよ敵をきをもちけれバ。相陣之のきりも而。重而御かせいを申うけて引のきて。各々はむつまじそりに城を取給へバ。よだの源七郎は。天神林に行而。をさひにをりけれバ。其時も大久保平助に。てつぽうを相そへて。りせいに越たり。各々は。むつまじそり寄引取給へ共。大久保七郎右衛門者。こもろの城にまいりける處ニ。天正十三年乙酉(キノトノトリ)の暮に。石河ぼうき守さやくしんをして。女子を引連れて。岡崎寄引のけける。上には岡崎へうたふせ給ふ。大久保七郎右衛門にも。さうさう罷上候へと。ごむろへ。日々に重ねれ御ひきやく(飛脚)立けれ共。七郎右衛門。いそぎて上ならバ。上方は亂(ミダレ)而。早七郎右衛門を落(ヲチ)行と云ならバ。爰元を亂而。一騎をもをき而わらバ即(スナハチ)さなども信(ヨセカタル)者ならバ。さおひなくとふ御座し。其故越後にも。信玄之御子に。御せうどう殿と

申而。御目の見へざる之御入候う。是親子を甲州へ。入奉ンやうに申而。是を何とうと心がけさるに。さされ有樣に申候へと。何とおく申樣に候ふへバ。しし(自然)前左樣之儀も有らバ。甲州迄も亂(ミダレ)而可有。左樣にも有ならバ。いよいよ御まけ(負)に可被成候間。爰元を少見合而。罷可上と申而。有とは申せ共。重々仰被下候へバ。其儀ならバ。されぞのこしおきて。罷可上と申而。御地行お申上而。可出に。されいよ。かれいよと申せ共。御地行之のぞみ處にあらず。石川ぼうき守さやくしん之故は。親。女子之ゆくゑをしらずして。のこり所にあらずと。各々申もちつていたり。七郎右衛門は其儀ならバ。是非に不及。各々は歸り給へ。我等が是に可有と云ければ。各々申は。たとへば親女子は注を申共。我等共斗罷歸る事は。中々有間敷。何方へも。共かくも御貴殿次第と申。七郎右衛門は。されに申而もがつてんなし。然者平助是に有而くれよかしと被申たれバ。我等も何をも同前に候う。ぼうき守いふを候うなざの下に。母と女方をおきて。とらきさるもしらざるにも。御地行を申而くまんなどし。いまれ而。跡にとゞめる者哉可有り。其故爰元之樣子おも。御らんせ候うとく。命ながらへ而歸り而。御地行申うけ申事かなし。其故ぼうき守ぎやくしんの故は。

定而。なふりさの儀には有敷ければ。上而を死ぞる。とゞまりても死ぞる。とても死ぞる物ならバ。御旗(ハタ)先にて打死を可仕。同命をまいらせなりふ。爰元にてもて(果)候へども。人もなりナ間敷候らへバ。まく(幕)の内之打死に候ふ。其故母之儀は。御方にも母。次右衛門。権右衛門にも母にて候へバ。我等一人之母にあらず。我等こそあらず共。両三人之御入候へバ。思ひおく事はなけれ共。女房之行へをしらずして。其故命不定成處にて。御地行之のぞみ處あらず。御地行は。えんまわう(閻魔王)れ。御前へさゝげ候はん哉。何と仰候共。とゞまり申事は。中〳〵思ひよらず。ふつゝといやに候ふ。其時七郎右衛門申は。其方が被申候所げに〳〵左様に候ふ。母之儀は。子共あまたあれバ。あんずる事なし。女子之儀は。そうき守ちりくにおきたるに。何と成たるをしらずして。御地行之のぞみ處にあらざると被申候事。其儀は尤とうきこへ(聞召)而候。其儀は我等あやまつたり。かんにんせよ。然者何の野ぞみ(望)之なく。命おしてゝ。是に。其方とゞまり而くれよかし。其儀にあらざれバ。我等のかり申事ならざる間。偏に頼入と被申ければ。其儀ならバ心得申候。地行にたばさり而ならバ。中〳〵にかくでニ不及候へ共。何かなしに命をすてよと仰候處を。いやとは不被申

（評）終ニ是レ風聲鶴唳ニ同シク過キ去ルト雖モ強敵前ニ在リ人民未タ驚カザルノ際、遂ニ國境ヲ守リテ本國ノ變事ヲ聞ク其情想フヘシ
又曰ク石川ノ逃亡實ニ德川氏ニ於テ意外ノ變事トス唯夫レ意外ナルカ爲メ一時其人心ヲ動乱セシメタル甚タシカリシヲ視ルヘシ

候ふ間。さら〳〵一時を早くいそがせ給へと。重られ御意に候に。爰元之儀。あんじ給ふ言なと而早〳〵と申而。暇乞(イトマゴイ)して。のがせ而。我は酉(トリ)之八月寄。戌(イヌ)之正月迄。とゞまりける。然共そうき守させ候手立なをせずして。引のきける」
然る處に。天正十四年丙戌(ヒノヘイヌ)之年。尾張大ふ(内府)。家康へは御さたをなくして。くわんぱく(関白)殿へぶぢを(無事)はくらせ給ふ處に。くわんぱく殿寄して。尾張大ふは。早ぶぢに被成候ふ間。家康を御ぶぢに被成候らへと仰被越けるバ。尤の儀成。大ふ之頼被申候へバこそ。手ぎれは申され。大ふさへ。一身被申候はゞ。我等におひ而は。子細なしと仰はりされければ。其儀においては承存知候。然者とつして申合可申ためなれバ。我等之妹(イモト)を可進とて。其御定を被成而。頓而御越(輿)を入給ひて。御妹婿(イモトムコ)殿に被成ければ。此故に上落(洛)をせずしてはなりなりざる事なれバ。然者御上落可被成と。御意之有ける處に。坂井左衛門督被申けるは。御上落之儀共さりとは。ゆるれざる思召立にて御座候ふ。菟角に思召とゞまらせ給へ。御手ぎれに罷成候ふとても。是非ニ及ざる儀共成と。しきつて被申上ければ。各々諸大名衆を。右衛門督被申上候ごとく。御手ぎれに罷成申共。菟角に御上落之儀は。ふんべつ(分別)に

なノ下けヲ脱カ

及不申。何と御座候へても。今度之御上落ハ。是非に思召とゞまらせらを可被成と。各々をしきつて申上給へバ。左衛門督をとゞめ。各々ハ何とて左様にハ申ぞ。我一人腹を切て。ばんみんをたすけなし。我上落せずンバ。手ぎれて有。然共百萬騎にて寄くる共。一合戰にて打たさすなれ共。陣のならいハさもなき者成。我一人之かくごをもつて。たみ百せう。諸侍共を。山野にせめてころすならバ。其もふせいのをヒくもおそろしき。我一人腹を切ならバ。諸人之命をたすけおくなし。其方などもかならず。何かの儀不申共。ゆひ事をして。諸人之命をさすけおけと被仰られバ。左衛門督も。左様にも思召に付而ハ。御尤成。御上落可被成之由申被上けるを。さすがにおとなれ。御返事にハに相さまと申ける。太香者。御上洛之由を聞召而。其儀ならバ。忝存知候。左様にも思召ならバ。若御用心之儀をも思召可有候へバ。母にてまします人を。岡崎迄もち物に可進と被仰而。御老母之萬所を。岡崎迄御越被成けれバ。其迄に及不申忝と被仰而。井伊兵部之將と。大久保七郎右衛門に。おばけおかせらを給へバ。人しち之御越有而。諸人を大いさをほきてよろこぶ。御上洛有たる時。兵部と。七郎右衛門を召而被仰けるハ。若我が腹を切ならバ。

本書御上洛被成けり以下五行ハ眞黒ニ塗ニ而けす

萬所をがいして腹を切可有者成。我腹を切たり共女共をバ。たすけおきて歸すなし。家康こそ女房をがいして。腹を切さると有ならバ。異國迄の聞へも不ら可然。まつ世の云はさへにも可成。然時ハむ。まん所をバがいし奉り。かならず女共に。手さし有間敷と仰おかれて。御上落被成けるに。何事もなく。御歸國被成けれバ。各々上下共に目出度と申。よろこぶ事かぎりなし。然間萬所も。御よろこび有而。御上落被成けり。然共六ケ敷や思召けるか。其後に御どくをまいらせんとて。御ふるまい之時被遣けるに。大和大納言とならむせ給ひて。上座に御座被成候はるに。御うんのはよきによつて。御せん之出る時。御しきだひを被成而。大和大納言殿を。上座へ上させ給ひ而。下座へいうひらせ給ふゆへに。其御せんが。大和大納言殿へまひりて。家康之きてしめさせん御どくを。大和大納言之參而。もてさせ給ふ。さて其後年ニ御上落被成けるに。さおひをなし」天正十八年庚刀三月廿八日。小田原之御陣立成。うき島が原へ押出し而。さうが原に。御陣之取せ給ひ。みふ山之城ゟ。人數を指越給ひ而責させ。其寄。もてね山をならおしにおがりて。山中之城を。とおりがけに。のまおとして。太香之御旗ハ。なぢりがとうげに。打

わがらせ給ひ而。石がけ山に御陣之とらせ給ふ。家康は又やぎ野へかゝらせ給ひ而。くの原へ出させ給ひ。其寄。いまい。いつしき。濱之手をうけとらせ給ふ。思ひくに。山くをの里越而。城を取まきけり。くわんとうへは。賀が。越前。のと。越中。越後。しなの衆を。引ぐれ而。賀が大納言。うへ杉がげかつの出給ひ而。くわんとうの城ゞをのこらずうけとりて。小田原一城になす。然る所に。早松田尾張をむつしん之くわ立けり。又なお河山城も。城寄がけおちをしけれバ。城中を早成間敷とて。ぶち之わたがいにて落城する。其上にて。氏まさと奥州と兄弟に。腹をきらせ申而。氏なおと。安房守と。美濃守と。左衛門助おバ。たそけ給ひ而。高野山へやり給ふ。さて又。家康は國がへ可被成におゐ而は。關東にかへ給へ。いやに思召バ。御無用成。何と成共御存分次第と被仰けれバ。尤かへ可申と被仰而。三河。遠江。駿河。甲州。信濃五ヶ國に。伊豆。相撲。武藏。上野。下總。かぞさ。六ヶ國にかへさせらせ而。關東へ。庚寅之年うつらせ給ふ。其寄太香は。御馬が入。天正十九年辛卯七月日。くわんむく殿。大將として。奥州陣有り而。家康之御旗は。岩手ざわに立。然間奥州をことくくおさまりて。關白殿は。板屋越を被成而。よねざわへ入せ給ふ。家康をよ

わざわへ御越被成而。關白殿と其寄御歸國」

然間文祿元年壬辰に。かうらへ陣とて。太香之御馬も。名小屋に立ける。家康之御馬も。名小屋に立ける。しよせいはかうらい國い立けり。辰之年御出馬有而。午之年之八月御歸國成。然間其後に。關白殿(秀次云)御むほん之由仰被出而。しゆらく之城を取出。高野山へおくり奉り而。御腹を被成たり。其後御手がけの女房衆。おまゝ三町がわらへ引出而。からをそろ而。一ツおなに取入而。ちくせうばかと名を付而はきこめ給ふ。然る處に大香は。慶長三年戊戌。八月十八日に御年六十三にして。朝の露ときへさせ給ふ。然共各々寄合給ひ而。七歳に成給ふ秀頼を。てうあひ有ける。中にも内大臣家康を。大香の頼奉らせ給へバ。取わけての御てうあひ成ける。然る處に。各々諸大名衆寄合而。大ふ之御しおきおきれバ。我ゝれ存分にわらずと思ひ而。所大名一身して。家康へ御腹を切せ申さんと。申合ルる處に。伏見寄大坂へ。御見舞にうつらせ給ふ時。よき時分と心得ふる處に。此由を藤どう佐土が心得而。今夜は先我等所に御座可有由申上而。我所にて用心きび敷し奉りける處に。伏見にのこ候御普代之大名小名。夜がけわしてかけ付たれバ。早成間敷と

思ひ而。しらずがほしていられれバ。城へいらせられ給ひ而。秀頼にたいめん被成而。伏見
へかへらせ給ふ。然共此儀思ひとゞまらずして。又伏見にて。早大方。敵味方。見へ申かつ
て有様に有りけれ共。取かくる事はあらざる所に。大坂寄。賀加大納言。おそしやしと。
来らせ給ひ而。兎角にむかひ島へ。うつらせ給へと仰られれバ。むかい島へうつらせ給ふ。
其寄。とく〳〵氣をちがへ而。我をしくと申けして。後には石田治部将一人にかけて。
後には寄合而治部に。腹を切せんとそる處に。家康公しひにおはしましけれバ。各々治
部をゆるし給へと被仰られ共。各々きかざれバ。其儀ならバ。石田は先さお山へ。引入而
可有由を仰被出けれ共。道へ押かけて。腹を切せんと。各々申由を聞召而。然者中納言。お
くれと御意之出けれバ。越前中納言様之おくらせ給へバ。さをひなく。石田はさお山へ
行而いられけり。然供治部之将は。此御おんをかへしけなきとはおもはずして。心中に
は謀叛之たくむ事計成。然間あいづの景勝は。國へ暇申而くだりけるが。其後召共来ら
ず。其儀ならバ。打取らんと而。家康之むかはせられ給へバ。北國。中國。四國。九國。五畿内。
關東。出羽。奥州迄殘所なく。あいづ陣へぞ立ける。然間都を立而先陣は。なす野ヽ原へ押

出せバ。後陣は。未尾張。三河。遠江。駿河を。おすも有り。小賀。くりもし。小山。宇津之宮に
陣之取。古賀には家康之御旗か立。宇津之宮には将軍様之御旗が立。然る處に。石田治部
将。謀叛をおこして。あきれ森。しまづ。あんこく寺。小西攝津守。ましる右衛門督。なつか
大藏。大谷ぎやうぶのせう。ゐ巳の五郎左衛門。たち花左近。金吾中納言。ぎふ中納言。宇
き田中納言。てうすがめ。小田之ちやうしん。其外大名共が。跡にて敵に成。伏見之城を責
取而。松平主殿助。松平五郎左衛門。鳥居彦右衛門。内藤彌次衛門を打取。かち時をつくり
て。大津の城をせめあおのが原へおし出す。東にては景勝。佐竹吉宣。さなだが敵に成。然
間あひづ之御陣之御やめ被成而。上方へきつてのぼらせられんと被仰ける處に。本田
中務。井伊兵ア將御内談被申けるは。上方へ上らせ給ふ儀は。如何にも御座候。先此地を
御しづめなつて。其後きつてのぼらせられ。御尤かと奉存知候儀は如何に御座可有と。
被申たれバ。ごんごどうだんなる儀を申者共かな。我せがれ寄弓うつぶを付而。度々れ
事に相付而有物を。いそをせいまていかゞせん。大場へ押出し而。一合戰してしるすべ
し。早々汝共は罷上給へと被仰而。御先へとく〳〵御人數をのぼされたれバ。先ち

其手ニのらざるハ其手ニ會サルコナリ

あたやトハ穢多非人ノ類カ

まはりにぎふの城を責取たる。其手にのらざる衆は。がうどへ押かけ而。がうどの敵と
きりくばして。おひ打に打而。其寄わおのが原へ。押上而陣之取。敵は大がきを旅城と云
てかしは原。山中。ぜん塔。さめがい。たるい。なか坂。さを山迄取はじく。敵は十萬余可有
か。味方は四五萬を可有か。家康御出馬なき内に。合戰をいたす物ならば。しぜん勝事も
可有に。せでかなはざる處を。のばしける處へ。慶長五年庚子九月十四日に。なをのが原
へ。押寄させ給ひ而。同十五日に合戰を被成而。金吾中納言うらぎりをして。きりくばさ
せ給ひ。ことごとく。大たいに形も少もとどめと云。不殘おひ打に打取せ給ふ。さを山の城を
のりくばして。火をかけて。治部將が。女子けんぞく一人も不殘やきころす。石田治部。な
んこく寺。小西攝津守。兩三人はいけ取而。京小坂。さかひを引渡し而。後には三町かはら
にて。なをやが手に渡りて。かうべをそねらせ而。頭を三町の橋之はめに。かけられたり。
なはか大藏をとどめ。其外之よ大名之頭おば。百せう共が所々にてきりて來る。うきだ
の中納言殿をも。いけ取而來りたれば。八條ケ島へ親子三人ながさせ給ふ。またたる右衛
門督は。命をたすけおかせらせ。岩井之城にあづけらせて。命ながらへたる斗にて。なさ

平人ノハ凡人ノト云意味カ

一せうトハ但言ニテ御敵を中たる上ハト云コナリ

ましくぞくらしける。なきの森は。おとなにて有る。きつ河がよひに御内はうをか上。十
五日之日は。是をうらぎり之心にて。むかへ而いたるによ。命をたすかり。主之國おも
あげ而。あんおんにして。御云ひふかきによ而。森には。周防と。長度兩國を被下けり。
島津には。薩摩日向。是兩國が。本領なれば。下おかれける。又は五郎左衞門は。上様へ之
御ぶ沙汰にはあらず。指むかひかたる。賀々之筑前に付か事之めいよくさのまゝ。御敵
をか。めんもく仕たりとかに付而。命を御ゆるされ被成而。其後召出され而少之御地行
を被下けり。立花之左近はせゝ之城を責而。御手きかたる者成を。命を御たすけ被成候
儀さへ。ぞく太成御おんに候うに。召出され而。過分之御地行を被下て。御用に罷可成者
と。御意之候う儀は。平人之ふんべつに不及。先指あたつて。御用にたゝざるは。御敵をか
たるが一せう。其故御用に罷立間敷と思召而も。今度御敵をかさぬ人は。重而も御用に
立事は治定成に。何をもく御用に立たる衆寄。立花におゝく被下候儀は。御手きをか
上たる御そうびか。然時ンバ。御敵をかせ之地行おもとる物か。此度之御取合には。池田
三左衛門と。福島太輔と兩人が。豆をふりたらば。石が原迄。出させ給ふ事は成がたかれ

中ノ下仙ヲ脱カ

我ハのゝそトハ自慢貌ヲ云フ

妨ハ説文ニ害也一曰礙也トアリテハカラヒノ假名ハ如何

共。三左衛門ハ家康之御むすめにハ。婿(ムコ)殿にておハしませバ。御見かぎなくてもかなはざる御事成。福島(フク)ハ。さりとハ思ひきり而御味方を申。きよ寸の城を。あけて渡し申事ハ。たぐひすくなき御ちうせ法成。然る所に将軍様ハ。ゆたの宮寄御立被成。中道にかゝらせ給ひ而。押而上らせ給ひける處に。さなだが城ゑ。とおりがけに。打よせさせ給ひける。将軍様。御年二十二之御事なれバ。御若く御座被成候に付而。本多佐土(渡)を。付させ給ひ而。御供させ給ふ。何かの儀おも。各々にまかせずして。佐土一人して指引をしたりける。佐土がさなだに。たぶらかされ而。我ハのゝや(頭)して。五三日目をおくりける。何事を。各々ハ佐土次第と被申而。罷在間。佐土がはからひを。むやぶされ(休)指引こそよくも可有。武邊之したる儀ハ。一第(代)に一度もなけれバ。何かよかるらんや。然間。二三日をむそく付せ給ふ。何時を。何事に付而も。其道〳〵に。ゑしたる者に。指引おバ。させてならでハ。事之ゆくべきに。佐土が。我がわしくしたるとハ。いはずして。後にハしらずがほしていられ共。何事を。皆(ミナ)佐土が妨成(ハカライ)。其時(様)。くり引をしたり。是も佐土が。かうしやぶりにて。くり引をして。後にハ我がまゝ(利口)に云けれ共。人々ハ佐土がくり引とて。わらいける。くり引と云事ハあ

(評)文事ナキ者ハ文人ニ卑メラレ軍功ナキ者ハ軍人ニ斥ラル是レ古今其轍ヲ同フスル所佐渡ノ失策未タ必ス斯ノ如ク甚シカラス

・ふしんハ城普請ヲ云カ

れ共。法いにくり引に合たる者ハなくして。佐土がおしへ而むしめて。各々もくり引に合たり。くり引に不及。敵が城寄出たらむ。ゐつ取〳〵おひ入而。付入に城をとらんとハおもひ而。さても〳〵佐土ハくり引ハしたり。さて又。さお山にて。先せいに追付せ給ひ。其寄伏見へうつらせ給ひ而。押而大坂へうつらせ給ひけり。秀頼に腹を切せ給ふかと。各々存知られバ。御しひなる上様にて。歸而後にハ将軍様之婿(ムコ)殿に被成ける」

然る間慶長十九年甲刀(キノエトラ)之年。秀頼所(諸)國之らう人をかゝ(抱)へ。ふんどう(分銅カ)をくだして。竹をわり而。それへいながして(鑄)而。竹ながしと名付而。らう人共にとりくれ而。十萬余。ふちせらるると。家康聞召而。其儀ならバ。秀頼之御ふくろを。江戸へ下給へと仰法かわされ候れ共。思日不寄と御返事有られバ。其儀においてハ。國おも可進に。大坂をあげて。國入をし給へと被仰られ共。其儀を思日不寄とて。いよ〳〵所(諸)らう人をかゝへて。ふしんをして。てつやうを見がき。矢之根を見がくと聞召而。其儀ならバ。屋つしんかと被仰る所に。秀頼もりハ。かさぎり(片桐)市之守(正)。いけん之申るゝハ。何かと被仰候う御時分にあらず。菟角に何と成共。家康之御意次第に御しまがい被成而。御ふくろ様を得戸(江)へ御越被成而。御尤

脇立頭立ハ水ノ深サノヿニテ水カ脇マテ頭マテアリト云フヿナリ

石ノ下脱字アラン

虎口ハ馬出シノナキ城門ヲ云フ

と申上られし。おふの志ゆり。同しめ之助。同道けん。さなだ左馬助。あかしかもん其外之らう人共が。寄合而申ける八。兎角に御ふくろさまを。江戸へ御越被成候儀八。いらざる御事に候う。市之守八家康之かさんを申候へバ。市之守を御せんぎひあれと申に付而。市之守八そいだへ引のけける。さて八むかんにおひ而。うたがひなしとて。東八。出羽。奥州。關東八ヶ國。當りい道。御き内。西八。中國。四國。九國。北八。加賀。越前。のと。越中越後。日本に殘無所。大坂へ押寄ける處に。大坂寄八。河内。攝津國之さかへ見をきりて。水をちゞませ。道をあしくしなりけれバ。家康。秀忠。御親子様八。都を御出馬あつて。所せいた。ならロを。やうりう寺。ぢうめう寺。平野へ出させ給ひ而。相國様八。すみ吉に御陣之取せ給ふ。大將軍様八。平野に御陣を取せ給ひ而。岡山へ御陣を取よせ給へバ。相國様八すみ吉寄。天王寺へ御陣之よせさせ給ひ而。ちやうそ山に。御陣之取せ給へバ。所せい八。城を取まく。然所に。城寄八。天満。せんだ。野田。福島。かも田が城迄。指出而をこ。然所に。八すり淡守。かもだが城へ押寄而。たゝかいなれ共。取事之ならざれバ。石河主殿頭。よこやにかゝり。きび敷せり合而。ふかき江河を。脇立頭立にてとひ入く越而。責かゝりなれ

バ。たまらずして。あけてせんだへ引入處に。八寸かの里入。次の日。せんだをあけける處に。石主殿頭の里入而。せんだ橋迄押寄而。橋をこさんとする處に。敵八こさせじとそれ共。あふり之衆。主殿頭處へ。そける衆一人もあけ候バ。敵八是を見て。あふり之てつやうをあこめて。打立られ共。事共せざして。良久敗たゝかひなれバ。相國様聞召而。あふりの者共八。をけずして。主殿おバそてころすう。主殿八何とて目をわうざる處へ。押寄けるぞ。ざうく引のけよと。重々御こうひ之立なれバ。其儀ならバと而。少引のきて。小口をうさめ而い入りけるを。天下よかされあくまならざり。相國様も。大將軍様も兩日之手がらを御かん被成なり。さて城を四方寄取こめ。高く付山を付而。大ぜいをうけ。又八ゑぐちを。こきさらせ給ひ而。天満。せんだの河をやし。天地をゆゞかせ責させ給ふ。然る處に越前將少様と井伊掃部と。亂入ンと而やりへとび入ど。いをのり。既のりいらんとしなりなれ共。あたり之衆一ゑんにうまいをあく。けんぶつしなるふせいあれば。敵八此由を見る寄も。あふり之小口を指おきて。おりうさありて。ふせぎなれバ。亂入事をならずして。引のきケル。ひるいあさ仕合不申及。然る處に。城を成間敷と心得而。あこう

手出しにトハ手初メヲ云ナリ

いに成けるハ。此儘ハおりにゆるし給へと申けれバ。相國之被仰様にハ。其儀ならバ。惣かまいをくずし給へ。其儀にをゐてハ。なおりに指おかれ給ハんと。御意なれバ。尤とおうけを申而。ぶちに成されバ。おそしとやしと亂入而。惣かまい之。屋ハ。やぐらをくずして。一日之内に。日本國之衆が寄合而。一日之内に。ほりをまつたいら(平)にうめ(埋)て。次之日ハ。二之丸へ入而。二之丸之屋ハ。やぐらをくずし石かけをほりそこへくずし入而。まつたいらにうめ(埋)させ給へバ。秀頼を。しよろう人を。もろ共に。惣かまいと申せるに。二之丸までかやうに被成候ふ儀共ハ。めいわく仕と申せバ。もとより惣かまいと申つる。たゞし本城おバやぶる間敷と申せるによりて。本城ハやぶらず。其段にあれば物おもいなせずして。うめさせ給ひ而。相國様ハ。御先へ京と(都)へ御歸馬被成けるに。大將軍様。御跡に殘せ給ひ而。御しおき共被成。五三日御跡に御歸京被成けり。此故ハ。秀頼重而手を取出候共御心安と御意被成。御親子共に。卯之正月駿河。關東へ。御歸國被成ける處に。二月ハ早秀頼。手かまりの由つげ來る。然る處に。手出しにさかひ(堺)之町をやき而手を出そ。おふのしめ(大野主馬)。さなだ左馬頭。あかしかもん(明石掃部)。其外之者共が申けるハ。京とをやきはらい。

慶長八ノ卯ニアラス元和元乙卯ノ卯ナリ

兩而手ハ二字衍ナラン

大津をやき而。せたの橋をやきおとし。其寄。宇治橋をやきおとして。あふをやくやしと申處へ。早相國様之御馬が京とへ付。押付而早得戸(江)寄。夜日につい而。押つめさせ給へバ。大將軍様を。つゝいて伏見へ御付給へバ。秀頼之思召事をかなはず。然る處に。ふる田お(織)りア(部)ハ。京とをやき立申さんと申而。秀頼と内ちう(通カ)申處に。あらはれ而。其くされ者共迯おちされ。とう(東)寺に。とりはけにかゝる。古田おりアハ御せいばい被成ける。其外にも御せいばい人おゝし。かゝるが故に。慶長八年癸(ミヅノト)卯五月五日に。京とを御出馬被成而同六日にどうめう寺くちへ。後藤又兵へをしなめとして。各々出ける處に。たつ田ぐち寄出給ふ乘。越後之かつさ守様。まさむね(政宗)松平下總守。水野日向守。此衆に出合而。松平下總守。水野日向守。指合而。兩手之前にて合戰して。さんざまけ(負)て。後藤又兵へハ打れける。其外もいくさして。おひ打にせらる。大坂指而にげ入。平野筋へハ。木村長と(門)が出けるが。井々(伊)掃アと。藤道(堂)和泉と兩人指合而。兩而手にて合戰して。木村長とを打取けれバ。大坂指而。もいくさしける處を。おひ打に打されバ。のこりハ大坂へにげ入。しぎ野筋へハ。榊原遠江が。おひ打にしけり。然る間。同七日にハ。御兩旗(ハタ)にて押つめさせ給へバ。さなだ左馬之

諷ハ諷諫又ハ諫刺ナドイマシムルノ意味アルヨリ來ルカ

助ハ。天王寺ゟ。押出しける處に。大將軍樣押寄させ給ひ而。御旗本にてきりくずさせ給ひける。大將軍之御手がふくろうだいむゑんあり。然る所に。城に火がかゝりければ。大坂内が。町迄一間も不殘やけうせいけるハふしぎ成。然る處陣(イクサ)そぎて後に。味方くずれてそうろう。然る間。秀賴ハてんしゆ(天主)に火かゝり而。せんじやう(千疊)敷をやけられバ。山里ぐるわへ。御ふくろ女房立引連れ而。御入有處に。井々(伊)掃部を仰被付られバ。おふのしゆ(大野修)り(理)罷出而。御のり物を二三でう給候らへ。罷可出と被申候う由申されバ。御ふくろ斗のり物にて出給へ。其外ハ。馬かち(徒歩)にても出給へと被申されバ。何かと言而出かねさせ給へバ。其儘てつぽうを打てみられバ。かなしやと思ひ給ひけるや。火をかけてやけしに給ふ。御供にハ。おふのしゆり。まのゝ(眞野)九ぶど(藏人)。しやうかいの守。是ハ秀賴之供をして。腹を切而。やけしする事。たぐひなし。野村伊與守ハ行方なし。伊藤丹後守ハ。秀賴さい後の場をしづし。さなとくぐり而出けり。おふのしめ。千石惣彌ハ。行方なし。ちう寸かめ(長曾我部)と。おふの道けんハ。そちて。此方彼方(コヽカシコ)。さなよひありく所に。ちう寸かめおバ。やわらにてとらまへ而。高手小手に諷(イマシ)而。二ちやうの城之。でまよせ(駒寄)にしさり付而。さらし給ふ。道犬をバ。大佛にてとらまへ而。高手小手にいましめて。さかい(堺)之町を引而。兩人ながら。三町かわらへ引出して。おやがが手にかけて。かうべをはねて。三町之橋之下にかけさせ給ふ。秀賴之おとしだね(落胤)の若君も。十斗に成せ給ふを。もり(守)がはれまいらせ而。伏見までおちゆかせ給ふを。いけどりまいらせ而。ごくもん(獄門)にて切奉り而。そなはちごくもんにかけさせ給ふ。然間。大坂にてをりさる衆ハ。命ながらへさる衆ハ。とくとく。具そく(足)をぬぎそて倮(アカハダカ)にて。女子と。にげちる。とくとく女子おバ。北國。四國。九國。中國。五き(畿)内。關東。出羽。奥州迄ちりぢりに。とらをけり」

さて。因果(インクワ)と言物ハ。有物か。大香(閤)之いにしへハ。松下加兵へがさうり(草履)を取給ひし人を。信長之御取立をもつて人と成。今大香(閤)迄あげ給ひける人之。信長之御おん(恩)之わすれ而。御子之三七殿を。ぬはのうつみにて。御腹をきらせ給ひ。尾張大ふ(內府)おバ。御地行を召上。北國におしこめ給ひ而。御ふちあてがひ(扶持宛行)をなくしておき給ふ。さて又。大香之御子。秀賴を。相國樣打奉らんと。大坂にて一度。又伏見にて所(諸)大名に仰而。打奉らんと。二度めあひぢ(會津)御陣之御跡に。所(諸)大名をもよおして。伏見之城をせめ(攻)ころして。相國へむかわせ給ひ而。

出頭人トハ本多ヲ指シ取むけてトハ取入ルト云意ナラン

三度め。又其年むほん之くわ立。所から人をふちして。敵ニ成給ふ事。四度め。又當年手を出し而。合戰をし給ふ事。五度め成。相國御しひ故。四度迄ハ御ゆるされ被成たれ共。さすけ度ハ思召けれ共。此たへハ是非なき次第。さすけおく物ならバ。又謀叛(ムホン)をくわ可立。然者。腹を切給へとて。御腹を切せ給ふ。是を見る時ンバ。因果(インクワ)と云物有物成。然る所ニ。御旗(ハタ)ふきやう之衆。今度たろ〳〵と云さるを。内〻聞召被成候哉。御旗之衆。一人ハかい之國之者おさり金右衛門とて。武邊もなき者成。一人ハ丹波之者。せうだ三太夫と申者成。是を武邊之有をなきも。御普代家ニてハ人しらず。御鑓(ヤリ)ぶぎやう之者。一人者武藏之者。若林和泉と申者成。一人ハ三河之者。大久保彦左衛門と申者。是ハ相國御代。御七代召仕りミさる共身之せんぞ仕たミり申。御普代之者成。然ると申處ニ。御旗ぶ行之衆。御鑓(ヤリ)ぶぎやう之衆を下めニ見て。何事をも御眼(カ)まきおもつて。御旗(ハタ)を我等共ニ仰被付ゝると。物とだんかうおもせず。御鑓(ヤリ)ぶぎやう衆ハおかり敷事申者共哉。出豆人を取むけて有まバてそ。彼等ニ御旗おバ仰被付さり。彼等が武邊も知まさり。おすが日おも見よ。彼等が何事をもあらバ。御旗を取まミす。すゐおバしる間敷き。又得てをして。彼等を取立ンと云さる衆。本田上野其外之衆の。どうぼうをもよくしりさま。此衆が武邊定の事。おかしき。むらそだなる事成。只今座敷之上ニて。何かれ事云而。なにしきり共。何事をもあらバ見よ。なてしるさる衆迄も。むしをかゝせ可申と云ける處ニ。相國様ハ岡山之方へおがらせ給へバ。御旗おバ住吉迄押而行。住吉ニて相國様之。御座被成候う方を。しらずして。とやうをうしなひ而。其時御鑓ぶぎやう衆と。だんかう申せ共。御眼まきにて。御身立にハ御旗を仰被付さり。加樣之時之ためにてこそ。御がんまきのちがひざるやうに可被成とて。一ゑんかまいざれバ。重〻云寄而。彦左衛門云ハ。然者御旗を阿ア野々原へ押上而。何を成大ばかへ両人かけあげて。御馬しるしの見ゑバ。其方へ押給へといへバ。尤とて。御旗をあとへ押返而。後かへ上而見けれ共。御馬しるしハ見へずと云。其儀ならバ。阿ア野々原を押上給へと云バ。天王寺を指而。押上けるニ。中程にて御旗立ける處へ。彦左衛門がかけよせ而。何とて敵ちかき所ニて御旗おバ。ふらめき給ふぞ。ちやうす山を左にして。押上給へと云けれバ。おさり金右衛門が申ハ。御身ハ危くふしき事をの給ふぞ。ちやうす山なるハ。敵にハあらずやと言けれバ。大久保彦左衛門云けるハ。御身こそ危さ

くふ敷旗おばたせ。ちやう寸山之を敵にてなきとは。されか云ぞ。ちやう寸山之が。敵なればこそ。御旗を。ちゞせずして。左へ押上給へと云。相國之御旗が。昔寄によ。左樣にふらめきて。敵にかゝりさる事なし。さゝちやうす山を左になして。押上給へと言けれ共。返事をなき。良有而。天王寺之方へは押ずして。東之方へ押ける處へ。又大久保彦左衛門かけ付而。何とて。敵をうしろになして。左樣に御旗おし押給ふぞ。御旗がまくれて見ぐるしきに。兎角ちやうす山を左にして。押上給へと云へ共。見々ぬも不入。然る處に。ちやうす山の東にて。やう／＼相國樣見付申。然る處に。早天王寺口にて。てつはうはなり。取合ける時。御旗を田中に立ける時。御鑓を。御旗の前へ出しければ。かさか金右衛門がかけ出し而申は。只今迄御旗之おとに有ける御鑓を。御旗之先へ出し給ふか。我等はしらざると申時。彦左衛門が申は。不及云に。我等共のおぼかり申御鑓を。御身立にならせんならば。腹がいたき。其故物前にて御鑓が先へ不出そは。何が可出ぞ。其故物前にては。旗にてさゝき合物か。鑓にてさゝき合物か。何とて御身立之ならん哉。我等二人之とうぐを。かり度共ならせ問敷と云ければ。物をいはず歸りける。然處に。彦左衛門が云けるは。若林和泉殿御らんせよ。御旗ぶぎやうが何おもしらざる。てつぱう乘は見かすミに有り。てつぱう乘へ押付所かなはざる旗。をそるかに急ぶちさると申たれば。左樣ニ申たるかと云ければ。いや／＼さやうには不申。然者我等が可申と被申候へば。彦左衛門か申。いや／＼御無用に候。よき事おば。御かんじきに。我等仰付さりと云なし。なしき事おば。其方と我等。なんといさし候はん間御無用と申ければ。和泉申は。いや／＼御さめに候間可申と被申候へば。彦左衛門重而申は。御さめの處は指おき給へ。彼等がていにては。まつことの時は。御旗を立申事は成間敷。其時は御身と我等として立可申たればくるしからず。其儀は御心安可有と申處ニ。敵をたいぐんそる。然る處に。相國の御馬じるしの。天王寺之方に御座候うと見て。其方へ御旗を押けるに。頓而押付るに。天王寺之南にてミかた。にはかにくづれ而來りたれば。其時御旗を立けるに。二人之旗ぶぎやう一人もいず。相國樣は道寄天王寺之方に。頓而道ぐろに。御馬をひかえさせ給ひ而。御座被成候う。御座んには。馬のまとては小栗忠左衛門寄外は。一人もなくして。ちりぐに成けるが。にげさる事哉らん。又御さきへゆきたる事やらん。御前にはおらず。然

見かすミハ遠クヲ云フ

まつことハ眞事ナリ

馬乘ハ騎馬武者ヲ云カ

共少身之衆ハ。此時ニ候ヘバ。手前をかせぐとても。御先へ出而も。になひされ共。御目をかけられ而。人と成。夫ニ國之衆にをちいふれ而。御かげを見。人ニおぢをのゝかれける衆ハ。ろうにやくをきらはずして。上樣之御なさりを一寸となる事ハ。何なる武邊をしても。第一之なけなるに。ましていはんや。何れも有所をしりなる者ハ。一人もなけれ共。時のいせいによりて。我を存知なり。我を存知なりとハ申せ共。かげにてハ有所存知なると申人一人もなし。其時御旗ぶぎやう之衆。御旗之おなりにハ一人もあふぞして。むるか後來り而。ヤ坂金右衛門が申けるハ。大久保平助我等ハ。さたへゆかんと云ければ。彦左衛門申けるハ。尤之儀成。先にハやりがとゞまりなると云に。さらくゝゆきてやりを出給へ。我等ハ。仰被付ける。御どうぐ之有所にて可有と申ければ。金右衛門。然者。我等を參間敷と言ければ。尤之儀成。何事ハなけれ共。若何事をあらバ。仰被付なる御どうぐをまくらとして。とて給ふを。ほんまうと存る成と云ければ。其時御旗の所へハ參されせう田三太夫ハ先へ出而。むかひ寄。てつぽうをとなしける間。其に寄而先へ出而。我等をてつぽうをかけていなるとハ云けるが。まことにてつぽうをかけていなるやふ

ん。又ハくたびれなるやらん。人ハしらず。たとへバ先へ出而てつぽうをかけてある共ゆるされざる事成。仰被付ける御どうぐのおなりを。となきを申事ハきこへ不申。然間とゞめ寄。彦左衛門むかりいなる處へ。頓而そゞろ惣右衛門が來なる。をしはゞきて若林和泉が來る。御旗ぶぎやう二人ハ。とるかおそく來る。然間各々の被申樣にも。彼衆にましなる御普代之衆を有に。ゆるされざる衆に。御旗を仰被付ける物哉。其故上方と。御取合之處に。せう田三太夫を上方之者成に。仰被付候儀ハ。さりとハゆるされざると申。甲州關東之儀ハ。上方との御取合なれバ。くるしからざる事なれ共。是と申をしゆつとう衆之きに入なる故成。きに入而申被付而も。御さめにハ不ら可然事成と。各々さなしなり。さて又。相國樣ハ。五月八日に御歸京被成なり。大將軍樣ハ。御跡にとゞまらせ給ひ。秀頼に御腹を切せ給ひ而。其外御しおき共被成而。御歸京成」
其後相國樣。京とにて今度大坂にて之。よきおしきれ御せんさく被成けるに。あるいハ。でんちやうろうに相申なると云人も有り。又ハそうてつ法印に相なると云人も有。あるいハ。我〻互に立合而。せう人に立相なる人も有。事おかしきせう人成。昔ハ。出家やい

注ゝしてまかり
ハ不明或ハ續テ
守リカ

のきくち之武邊
トハ殿戰ヲ云フ

しやなどを武邊之せう人に立さる人ならば。中〳〵付合をもせざれ共。今之世ハまつ世にを成り。出家といしやが。武邊之見やくとり。又ハさつしれば。武邊に成と見へさり。又ハ度〻れ武邊之しさる者を。昔ハ武邊之せう人にハ立而有に。一代之内。敵之かぶの。おかきも。くろきも。しらざる者を。武邊之せう人に立る事。腹筋之いたさやど。おかしき事成。相國様ハもと寄。度〻合戰に合付させらせ而。日本之事ハ申不及。異國迄を。かくれなき御武邊第一之相國様なれば。おか敷ハ思召共。それ〳〵に被成而。打おかせらせ給へば。申されさると思ひ而。武邊がなをしていさる人ならし。古き武邊者共ハ。目を引となハいせず。たゝしくばれざるまへに。たがひに注しして。まかり合さる時之武邊ならば。よ引せふひてこそいさり。其故武邊之しなをおゝし。昔ハくばせくち之武邊ならば武邊とき武邊とてなめさり。敵くばれさる處へ。人さきにかけ入さると云共。其儀ハ。昔ハなめず。のきくち之武邊が成がたき者成。然間のきぐち之時。手きはくて。敵にはかれ申時ハ。五人十人にハ過ざる者に候間。のきくち之武邊を。昔ハなめ申成。又こゝに。只今ハおもしろき事を云。かぶとをきさる者の頸を取てハ。もぎ付と云事。昔ハなけせば。只今さく。

ふ風ハ夫賦カ

（評）當時ニ於ケル戰爭ノ實況ヲ概見スヘシ果シテ知ル普通記傳ノ載スル所概子皆虚飾附會ニシテ容易ニ信スヘカラザルヲ戰史ヲ修ムルニ志アルモノ深ク注意スヘキ所ナリ

とうせいせうか。昔ハ。小者。中間。ふ風之頭成共。押注。おされ注之處にての頭か。又ハやり下之くびか。ふか入をして打さる頭などの。手がふなる處にて取頭ハ。何くびにてもなれ手がふと云さり。今度之。大坂などのやうにのなひ頭ならば。かぶときさり共。さとへば。大將之くびなり共。手がふの高名とハいせざるに。大坂にて。かぶと頭を取さるとて。せりうそる事之おかしや。然共。くばれて。よぐる人が歸し而。しさる武邊ならば。其儀おば。殊之外になめわげさり。今度ハ。せしめ寄くばれさる敵なれば。各々馬にておひかけなれむ。何時をも。か樣に馬にのせ而。合戰ハ可有と斗。とうせい之衆ハ。心得候へ共。合戰之時ハ。見なく〳〵馬寄おひおろして。馬ならば。うしろとなひ寄。せるかにとおく。やる物とハしらずして。何時を馬にのせ而あらんと斗言を。せうなき事成。然る所に。今度相國様の。御旗が行之衆。すろ〳〵としさるを聞召被成候哉。小栗又一郎と。大久保彦左衛門が。罷出て有けるに。御座の間寄ひろ間へ成せ給ひしが。彦左衛門を御覧せらせ而。汝ハ旗に付而來りさるかと御意之候へば。彦左衛門手を付而うしろを見けせば。汝が事にて有と御意なれば。我等ハ御鑓に付奉り申と。申上ゝれば。汝ハ旗にて可有と。御意なれ共。い

●たくらたトハ役ニタヽズト云方言也めハコイツめアイツめト云如シ

やゝ御鑓に付奉り申さると。又申上ければ。重而又。汝ハ旗にて可有と。はふらり成御ころを被成而。御意之有りけれ共。兎角御鑓に付奉り而参上申由申上ければ。其時。さらバ旗にハ誰が。付さるぞと御意之時。やさり金右衛門と。小田が付奉りて参さる由申上ければ。何。小田くゝと。二度迄。御意あれ共。三太夫をわすれける處に。小栗又一郎が申上けるハ。せう田三太夫と申けり。其時四方を御らん有れ共。御旗ふきやられ乗一人をわらざれバ。御ひろまへ御座被成候けるが。立歸らせ給ひ而。御目を見ならりせ給ひ而。五日之日よどにとまらんとハ誰がいふけると。わらく成御ころにて。三度迄被仰候へ共。御返事申上る人なし。ためめに。某に御わらさめ被成候間。某り事にをやと奉存。彦左衛門申上ハ。よどハ御とまり之儀ハ。誰と。人を奉指に及不申。上下共に左樣に不申候ら人ハ。一人を無御座と申上ければ。重而之御状に。我がとまらんといひざるに。とまらんと云やけるらめハ。たくふため迄と。御状被成而御むろ間へあらせけり。誰申共なく申けると。申上たらバ。誰が云けると御意被成而。云くちを御せり被付可申が。上下共不申候ら人。一人を無御座候と權上申によ里而。彦左衛門ハ。されせり被付不

よノ下いチ脱カ

申。又然る處に。二三日過而。水野日向守御目見へに参而有。小栗又一郎。大久保彦左衛門を有ける處に。御座之間寄さよゑんへあふせ給ひけるに。日向守を御らんして。今度ハ何とさるぞと。御意被成ければ。日向守申上けるハ。されバ。せんどの方寄三百騎斗。住吉之方へ参申たるが。其内寄卅騎程天王寺之土井に奉付而。参申さるが。何方へ参さるを不存候らと申上られければ。其時御状に。汝がさる者さと御状あれ共。人を指而之御状なければ。おうけを申上る人もなければ。彦左衛門手を付而。うさろの方を見ければ。汝り事成。汝がそこにいさればバ。さり怯ふんと御意あればバ。されバ天王寺之土井の方よりも。そゞ道之御座候ふける。其寄にげ出申者が。ちやう寸山之方より。岡山の方へ参本道へ罷出申而。本道をくばれ申者と。一ッに罷成申而参申に付而。敵味方之見へけハ。不存と申上ければ。其ハ敵りと御意有りければ。敵のりやハ見さり不申。ぜいぶんの地行取乗がにげ来り申けるが。定而其中へも入而参申が不存候ら。其くばれ而参候ら乗が。御鑓おもふさちちさ申。馬之上にてりあぐり取而。さ里おり申而もちて参候ら。其を見て。や里りばき共が。又きりおり申さるを御座候と申上ければ。御状に。さてもくさ

しぬけめかな。やり之みぢかきがよきと云事なれバ。いはしりたるぞ。然者共者共ハ。何方へなげけるぞ。御前之方へ参りけるが。御前様寄。某などハ御先に。罷在ける儀に御座候へバ。前後ハ不存と申上ける時。其儀ならバ。やりハなきかと御たづね被成ければ。御鑓を御座候へ共。たぶん無御座と申上ける。相國様ハ。三間ほどよりみぢかきなれバ。そうべつになさらせ給ふ事なれバ。やりをきりおりたる者を。しぬけと思召儀共成。然る處に。其明之日二條の御かまひ之。火たきの間にての事成に。松平右衛門ハ。御旗ハ見ぬと云。彦左衛門ハ。御旗ハ立たるに何とてたゝざると仰候哉と云。いや我等共ハ見ずと云。又云。七本之御旗之立たるを何とて見給ハぬ哉と云。又立たる御旗をたゝぬとハいひも間敷と云けれバ。其時てゝに御入候各々ハ見給ふかと。右衛門にいひれ而。時之しゆつとうにおそるゝか我を見ぬくと各々くちを指上云ければ。されバこそきゝ給へ。御旗ハたゝざるになきまりたり。我等共も見ず。各も見ぬとの給ふに。御見一人斗立たるとの給ふハ。たゝざるがひつぢやう成と云。又云けるハ左様にも可有。頓而心得たりと云。何と心得給ふと云ければ。云ばつ之儀にハ有間敷。おそれながら各々の。やみの夜程に御らんせハ。我ハ月の夜程に見申ばし。月之夜程に御らんせバ。我等ハひる程に見可申。よく〳〵存知候へど。各々ハ其元へ御越候ハ而。御越有と仰候物ゾ。若其元へ御越候か共。七本之御旗を御らんせずンバ。なにて給ふか。其儀ならバ不可然と云ければ。重而之たゝかひハなし。然間。彦左衛門申ハ。其時御旗をさまりて後。ぐそくをぬぎて。ぐそくかさびら斗にて。其まゝ。せう田三太夫と二人参て。上様之御馬之立處。又ハ御旗之立所を見て返り申たるが。各々ハ御らんせ候かと云へバ。其時右衛門げにと見る所成を。何のふんべつをなくして見ざると云ければ。彦左衛門左様に見る所をさへ見給ハで。物をあらそひ給ふかと云。然る間。各々有事をろんじて。後にハ彦左衛門を。せやうのこりき者と云。又然る處に。二三日すぎて御前にて御せんさく有而。よく申ひらきたる人を有。又あしく申而しさるを有。然る處に。やりに付たる者。参れと有ければ。又彦左衛門が罷出る。然る處に御せんさくすぎて。御座處へいふせらせ給ふとて。彦左衛門を御らんじ付而被仰けるハ。汝ハ鑓に付而來ると云かと御状なれバ。かしこまつて御座候らと申上ければ。御けしきかゝり給ひ而。彦左衛門手をも付たる。たゝ見の廻りを。ふませ給へ

ば。よこだゝミの事ナレバ。二しやく四五寸をざゝりける其間を。御はたにてはらせ給
ひ而。汝は何とて我にははらざるぞと。御状之時御鑓に相そへられ。御旗本之所やりま
で。若林和泉と。某に仰被付候へば。千本に及申さるやまに御座候へば。御旗に付申さる。
御どうぐに御座候へば。御旗之有所に罷在由申上げをば。其儀ならば。何と云さるぞと
御状之候時。御旗が。大和が冬の陣場に立申候間。御やりも其に罷有さりと申上げる時。
そこに旗は立間敷ぞと御状之時。いや其に立申さりと申時。見ぬ共を見ざると云程に。
立間敷と。御状なれば。彦左衛門申は。何と御状成共。御旗は立申さりと申せば。早御けし
きかはりて。御はき指を。ふちまむさせらせ而。かしらへやこり之かゝり申など。御状へ
にてたゝ見をはらせられ而。我を見ざるなどに。兎角に立間敷と。重る御状なれ共。何と
御状成共。御旗は立申とはよく申をされば。御状よは。其儀ならば。何と云さるぞと
御状之時。ちやうす山之方寄。くずれ而来り申者が。御家中之旗。やりひは御旗共よふ見
くずして。御旗斗立而罷在と申上げをば。然者何と云さると御状之時。ちやうす山方寄。
参る者は。御前之方へ参而。御前之方がくずれ申と。申ける時。弓矢八幡。けふ之天道。

御座ハナワシマスカ

我が一代にげさる事をなきを。あれめが我をにげさると云。大久保七郎右衛門がちや
うのこときに。大久保次右衛門がこときやはめ成。相模お
を我がたすけておきさる。あれめがちやうのこと事を云と御意被成而。城内之ない
くやど御こゑのたかけをば。各々何事にやと申而。きもをけす。然る處に。本田上野守参
て彦左衛門が手をとりて。罷立とてはれて出る。上様之御そばへ。永井右近が参りて。御
道理にて御座候。そうなつちやうのこと者にて御座候と申上げをば。御腹をいさせ
らせ給ふ。然間彦左衛門召はらいが申ける。いはれざる御ことを返給ふと云けをば。お
のれふはなる間敷。何とて。上様をにげさせふをさると。天道おそろしく申上申さん哉。
上様は。小栗忠左衛門と。只二騎御馬に召而。御座被成候う。御あんには。二十人ぐミ衆を
きくといさる。然共ぜいぶんの衆は。にげてこそ有らん。御前にはあらず。上様こそ御
座被成けり。御内之きゝくは。おふかさにげける間。申ぞてあひにはあらす。然共此さ
たの御さばねには。ゆるゝゝ御さば被成候に付而。御前之方へ参申はるが。御前とは
程遠ざち申候間。御前へ参申而かふれ。不存と申上げをば。御きけんをよく御座はるが。

今日はせめ寄而。せり付く被仰候間。某も事之外。せき申故に。御前がくばりさると申
上る儀は。以之外の儀成。又御ともを返し申儀は。なつ之儀にあらず。御旗ぶぎやう衆。
すゝめさると聞召けるや。それをなくすと思召而。御旗がなげさると御状被成ける
は。上様之御ちがひ成。御旗に。きずを付させらきて。御ともがなげさると。被仰所にはあ
らず。其に。御腹を立せ給ひ而。我が旗はなげさると。御状被成候を。おの〳〵きゝ〳〵
と云さる。御取立之衆。中〳〵なげ申さり。我等共を見不申と申上る衆は。日本一之ひ
けと云。又は御ゆうさは之御事をおもひぞして。とうざの御きげんとり申たるは。さ
てなけうには。わふざるや。某は。相國様迄。御代御七代召仕はされ申。御普代之者あれ
ば。御旗にきずおば付申まじき。たとへなげ申さる御旗成共。なげ不申と。申上而。其が
御とがあらむ。くびはうたれ申共。御旗之なげさるとは何と云て可申上哉。各々はとう
ざの御意にいり申とて。以來之御主之ためおば不申。我等はとうざなくびは打せ申共。
以來之御ためあしくは。何と云てかは可申。相國様度々之儀を被成申せ共。見かたが原
にて一度御まけのくずれ申寄外。あとさきに陣(イクサ)にも御旗之くずれ申無事。いはんや七

●御そうどうの御旗ハ浄土ノ御旗ヲ云フカ
○法幢天蓋ハ佛具ナリ或ハ六字妙號抔記セシ旗カ
浄土ノ旗ハ厭離穢土欣求浄土ト記セシ旗ヲ云フ或曰御そうどうトハ御法度ノ訛リニテ是レヨリ出ル事ヲ禁スル即チ法度ノ意味ニハアサルカ
(評)亦是レ忠忠、其忠ニハ及ブベカラス

十に成ぶせらせき而。をさめ之御そうどうの御旗が。くずれては。何之世にむかをそへ
ぎ可被成哉。然時ンバ。我等が命にかへても。御旗之くずれざると申さるが。御普代之者
之やく成。又いかに御取立成共。とうざの御きにそむかざるやうにと思ひ而。以來之御
ためを。かまはざる事こそ。御ふざいにあらざる人のやく成。我等御ともを返し申而。か
ぶかひ申さる故に。おさめ之御そうどうは御旗は。くずれぬにある。其儀をかんがへず
云て。某を。上様にからかい申さる。我まゝ者と申人は。とてもまつせ。御主の御用には立
事有間敷。御ともをかへ云申故に。せけんにては。我等に腹を切せ可被成由を申と承候
へば。其儀あらば。我等から。かうらいへ。をち行而。石之かろうとに。入たれどても。の
がはゝ事は有間敷。其儀あらば。御前へ只今罷出而。腹を切迄とて。上下をきて出る處へ。
小栗又一郎が來り而。なども有かと云。何と云て被出けるぞや。其儀成。御前へ出給へ。
出むぐれたらむ。出る事成がたし。腹を御きらせ有あらば。切給へ。年寄衆云て。御意を得
被申候事は御無用成。其に付而。何かと被仰候はゞ。後六ヶ敷可有。ぢやうがうはさぐま
りさり。あしき事をして。云ゝさるには。ましき成。御主之御ためを申而。其があしき事に成

あらバ。是非をなき事成。只今可被出同道可申とて。來りけるとゆけれバ。よくこそ御出有られ。只今我一人罷出而。腹を切せ被成候ハゞ可切と存而。しさくゆへり。我腹を切なら。かいしやくにハ。何時も御身寄外ゟ賴可入人なくれバ。さいはい之所へ被出候者かな。腹を仰被付ぞ。御かいしやくを賴入事。目出度も。御出かな。いざや御ともせんとて。二條之御城へ參りけれバ。彦左衛門が來りたるとゆ而。各々けうさめがおゟて有ける所へ。上樣御出被成而御らんせられ而とおらせ給へバ。又一郎も心安とて。道同しなて歸りける。然間からかいゆたるよりも。被出間敷所を出るりと。人々をゆ成。然間。卯之年ハ。兩上樣ながら。江戸駿河へ御歸國被成たり」

然間。元和二年丙辰之正月。田中へ。御鷹野ゟ。御成被成たる處ゟ。ゟはかゟ。御はづらいにかせられ而。次第々々ゟ。おもり給而。卯月十七日ゟ。御遠行被成たる。御ゆひごんの儀。されたりさる人たなけれ共ゆなふハしなるハ。我がむなしく成ならバ。日本國の所大名を三年ハ國へ歸さずして。江戸ゟとめさせ給へと被仰ける時。大將軍之御状ゟハ。御ゆいごん之儀一ッとして。いそいゆまじき。然とハゆせ共此儀ゟおひてハ。御ゆるされ

可被成候う。左樣ゟも御座候へバ。若御遠行被成候ハゞ。是寄日本之所大名おバ。國へ歸しゆ而。敵おもなさバ。國ゟて敵おさせ。押のけて。一合戰して。ふミはぶし可申候。何樣天下ハ一陣せぞしてハ。おさまりゆ間敷と被仰候へバ。其時御手を合られて。將軍樣を。おがませられ而。其儀をきゝゆ度さめゟゆはる。さてハ天下ハしばまりさりと。御よろこび被成而。其まゝ御遠行被成候うとゆさり。下々ゟて。さても々々將軍樣之被仰樣ハ。承ごとかなと。しさをまひて。ほめ奉さり。然間相國こそ。卯月十七日ゟ御遠行ならせ給ひんれ。各々ハ不被下して。國元ゟてゆく々々と。其元しおき其外ゆ付而。來年被下給へと仰被越給ふ。此御とむゟ付。おそしむやしと。諸大名ハ被下」されバゟや。君之御めぐミあまねく。御あはれ見のふかくして。世をしばまり。かさくをあんおんなるゟて。昔を思ふよ。だいとうゑんの國よ。かんむつもる事三ケ年成。然ゟ草木としくかれうせ。人民多くほろびけるうへハ。鳥けだ物ゟいさる迄。いきのこるべしとハ見へざりける。國主大ゟなげき給ひ而。大法ひ法。のこさずおこなひ。雨を祈給へど。かなはず大王思ひの餘りゟ。諸天を恨奉りていはく。我生て寄此方きんかいをお

さなこゝろを合ハせてゆう祢んよちうして火境變淨地ト念シ給ふの類皆佛方上の事なれハ股ノ世よあるへきをなし又火境變淨地ハ姚秦の羅什三藏の譯したる法華經に出たる語なれハなり

かさず。まつりごと見だりにおこなふ共。思ハざるに。如此日でり出て。人之せいめいもくなし。身にあやまり。あやまる處あらバ。いましめ給へかしと。なげきやさるれ共。其しるしなかりけり。今ハ身づからふ命を。たゞのこめに。もてんにハしかしとて。廣き野邊に出て。かやをおゝくあつめて。高さ廿丈に。つミあげさせ。くぎやう大臣。きひの思ひをなす所に。國王ぜんからなりて。其かやの上にのぼり給ひ而。まさりに火を付よと。せんじを被成ければ。臣下大に辭して。付る物なし。其時大王の給ハく若あやまりて。まつりごとしやとを見だり成事あらバ。やきぬべし。なくる程の身ならバ。命いき而もえたなし。若又あやまらずハ。天是をまもるべしとて。大にげきせんん有りければ。せんげんぞむきがたくして。四方寄火を付けるバ。ミやう火山のごとくに。もえあがりて。ほのおそらにみえてり。大王もけむりにむせび。前後をわきまへがたくし。すでに御衣に火の付くれバ。御目をふさぎ。たゞ心を合。しゆう祢んに。ぢう志て。くわきやう變んしやうちと念し給ひけるバ。天是をあはれみ。大雨俄にふりくだりて。山のごとくなりける。ミやう火をけし。國王をたすかり給ふ。人民命をつぎ。五穀成就しけるとなり。是を大王之。御心

●圓珠經ハ論語ヲ云フ

一ッをもつて成。されバ。ろんごにいはくあやまつて。あらたむるにはゞかる事なかれ。あやまりて。あらためざるハ。賢かへりてぐなりと見へたり。然に此文の名を。圓珠とをいへり。まことなるたまの。ぜんをしるによそへてなり。公方樣ハ御とぞのをもき一ッに。天下をおさやかに。たせいもしばまり。國土あんおんにして。たみもゆたかにさかへ。目出度御代とぞ申けり。さて又。我はるかへきくハ。親氏。泰親樣寄。今。當將軍樣迄。御代拾一第之御事を。あらまし傳而。きゝおきしに。御代ゝ御しひを。もつて一ッ。御武邊をもつ一ッ。よき御普代をもつて一ッ。御なさけをもつて一ッ。是によつて。御代ゝをさかへなど。御せんぢやう目出度成。御子大將軍樣之御代に。わさらせ給ハざる時ハ。物をものゝさまわず。人に御とぞをかけさせふせ給ふ御事もなくして。何共御心之内をしれず。いかゞにしても。御代にはかせふせ給ふ御事。いかゝあらんと申人おゝき時。大久保彥左衛門が申けるハ。此君樣ハ。おご成御人にハあらせられまじき。其をいかにと申に。清康樣ハ。御年御十三にして。御代をうけとらせ給ひて。纔之案祥之小城を。をさせ給ひて。雜兵五百之內外之御普代之者斗にて。三河一國を。御年十七八之御時分ハきりをさめ給ひて。

はかな蛇ハ不明

愚ハ不明蓋シ恐ノ誤カ

●漢文帝ノ時千里ノ馬ヲ献ス帝受ケス、晉武帝ノ時太醫司馬程據雉頭裘ヲ献ス帝之ヲ殿前ニ焚ク

紅葉山ハ今ノ皇城ト吹上ノ御苑ノ中間ニアリ

○蘋蘩ノ禮

其後。小田祖正之中を。おひそだて。尾張を半國きりとらせ給ひ而。諸國にて。案祥之三郎殿と申而。人におそらせ給ふ。其清康樣の御そだち。又ハ。おさふさまでも。我親共之物語申侍るに。そてそをたゞさせ給ハねバ。うたがひをなき。御武邊ハたけくおハしまして。諸國之人の。おそれをなさざるハあるまじき。目出度御屋方可成ぞ。我ハ年寄之儀。夕さり、おもしらず。此かき物に。後。引合而。子共どもみよ。はかな蛇ハ一寸を出して。其大小をしり。人ハ一言をもつて。其賢愚をしるといふとハ。當將軍樣之御事成。御ざうたん之おもむきを承しに。御武邊ならぶ人有間敷ぞ。御普代久敷。召はかゝれ申せバ。御代を御ちやうきうに目出度成。是や。せいやうのことぞに。かんの文王ハ。千里の馬をせんしし。しんの武王ハ。雉頭の衣をやくとハ。今之御代にしらせさり。民のかまどにハ朝夕のけむりをゆるかなり。げん王の代に出せバ。かう王はださをのだ。げん國にきされむ。きしん。ゐばめをとくと云ことを。此君之御時にしられし目出たかしし御事成。抑。東照でんげんハ。かうしけなくを。もみぢ山にあがめ奉り。ひんぜんのせいしやたんにしげく。かう庵いしんぎよく石社成。其すいしやく三所ハ。中わひ神宮。おふしん三くしうれき

○本地ヲ思ヘハ本覺ハ法身本有ノ如來ナリ八萬ノ法藏十二部經ノ如來モ法身ノ如來ト本有ノ如來ト何ト分クヘキ一體ナリト名付テ三如來ト號ス本地ハ東照權現ヲ垂迹トシ藥師如來ヲ本地佛トスルナリ

○生界ハ衆生界經行ハ修行ノ人果上ハ成佛シタル位其三重ノ秩ヲアラハシ給フヲ云フ

○百王鎭護ナリ

よくたいなり。ほんぢをおもへバ。ほんがく法しん。ほんうの女來成。八萬ほうぞう十二ぶきやうハ女來を。法しんの如來を。ほんうの女來を何きとしくべき一たい成。名付而三如來とかう寸。しやうかいきやうけうくしやうの。みへのたもとをあふハし給へり。そくしうちんてのちういでおこして。一天せいひはにめぐにおハします。まことに是本朝の宗廟とて。源氏をまもり給ふとかや。げん世わんおんのせうだんハ。觀音のしんぜきをおこし給ふ。わふぎてもしんずべきハ此ごんげん成。相國の御さめに。せうちやうしゆいんのこんぜうし給ふ。今のごんげんどう是成。其外どうとうをさうぜうし給ふ。ぶつさうきやうくしんをわふぎ。御心指そくさうにして。せんごんを又ごくたいなり。せい大將軍ににんず。ちうさくをいちやうのうちにめぐらし。勝とを千里の外にえさりげにやせるかに。纔の案祥に御座之御時。清康。山中。岡崎を御手に入させられ給ひて。其後三河一國をおさめさせ給ひ而。御子廣忠へゆはらせ給ふ處に。伯父内前に立被出給日而。其後。御普代之衆が入奉り而。駿河の吉元を賴奉り而。竹千代樣を人しちに被進し時。まゝ祖父中にてぬすミ取。小田之祖正中へうし奉り而。御六才之御

ゐノ下キヲ脱カ

なさきのことゞトけしやくトハ不明或ハまことや、野史記ニテ何等ノ荷物ヲ云フカ又けしやくハ何貨ニハアラサルカ

年寄。はた大宮地が。はゞかりておはします御時は。かく可有とは。だれか思ひよらんや。今一天しかいをしるがへ。かゝらうらん。中天ぢくまで。たな心なくなびかせ給ひ。なびかぬ木草をなかりけるに。まことや。なさきのことゞに。天下あんたいなる時は。けしやくをもちひぞとは。今こそ思ひしられたり」

さて又。我子共。物をきけ。親氏之御代に。三河國松平之郷へ御座被成而寄此方。親氏。泰親。信光。親忠。長親。信忠。清康。廣忠。家康。此御代々。野にふし山を家として。かせぎかまりをして。度々合戰に。親を打死させ。子を打せ。おちおい。ゐとこ。むとこぞ。打死させ而。御ふうこうを申上。そのみならず。妻子けんぞく共に。むぎのかい。あはなゑのかいをくはせ。其身をそれをくいて。出而は打死をして。御ふうかう申上る。其そへ〱子供共が。只今は御前へ可罷出ちかふをなけゞば。ゆくゑをなき人之普代と成。一きふうからをして。世をめぐるも有り。御なしまふうかうをそるも有り。みなひあきなひをして。いもし。たはくりをうりて。世をおくるも有。又は御前御ふうかうをも申せ共。百五十俵。弐百俵。三百俵被下候へば。御前之御ふうかうを申せば。かみをゆひ申。若とられ一

上下トハカミシモニテ武士ノ朝服ヲ云フ

公儀之道トハ殿中行儀作法等ヲ云フナラン

人を。弐人をはれでは。かなはず。御城あかきを。ならざるとて。かちたしにてもならざれば。小者の五人三人もなでもならず。百弐百三百俵被下候物は。年中之上下。一しな又は若とう小者の。ふちきうにをたらず候へば。内儀は。昔親祖父のそぎわひのとく成。ひながいのてい成。各々御普代衆之そへ〱のくふしや成。それのみならず。其身がとがとは申ながらにて候へば。さふ〱らふみには。あらね共。御かんきをかふむり奉りて。こゝかしこにいくたいし。餓死に及も有り。然間。人を召はかう事。番匠之木をはかうがごとし。長木おばうはむりにし。見しかきおばなしき。はかむしらにす。如此人のきやう。ぶんげんにしるがひ而。心をちをして。あてがいはかふ。されば人をあまさずしてそなき事共成。又年比召はかう共。ちいさなとがあふんには。そはなきなり。あるぶんよい日くくんしは。よき事一ッしるに。おば。百わとがあれ共人をそてず。げらうはよき事百度しされ共。とがを一度しはれば。うら見をはる成。人をかへり見るには。我でとくある物は。そなてなき物成。是則。しうと成時は。人をもとかく思ひ。臣と成時は。人にもとかはゝならい成。さうなつ三河之者は。明暮弓矢をかせぎければ。かうぎ之道は何をもしら

きまんごくのきおふハ不明或云フきまんごくハ國きおふハ王ノ名カト又云フ幾萬石ノ卿カ

ざる。然と申せ共。かうぎのよき物。何に可被成。日本之諸侍ハ。こと〴〵く御内之者にて候へバ。これをあがめてせうくわん被成而。かうぎのよき物を御用に思召や。あまりかうぎのよき物に。昔を武邊をかせぎざる物なし。さて又。日本之諸大名に。金銀寶物を被下給ふ事ハ。海河へなげいれさせ給ふごとく成。其をいかにと申に。大名ハ百せう道前にて。此前にも草のなびきにて。よき方へ斗なびきければ。後世にをかく可有。何のいふざる諸國之者ハ。御身にも成間敷者に。過分の御地行を被下ても。其うへに御きづかひ可被成。御普代之衆之。うぶなろげなる子が。方々へちりて有を。召あつめさせ被成。御かんきの御普代衆をも。御ゆるし被成候ハゞ。五千を一萬を可有。是を召よせられ而御座あらバ。百萬騎にてよせくる共。上様の御先にてささらく物あらバ。きまんごくのきおふがよせくる共。何かハためんや。只今斗にをあらず。長親様之御時を。かうちやうれ新九郎が。一萬余にてよせかけたるを。長親様五百斗にてきりかゝらせ給ひ而。きりくずし給ひし事も有。家康様之御時。氏なをを四萬三千にて相陣を取時。相國様之人數ハ七八千にて。四萬三千にはらハせ出させ給ハねバ。氏なをハ國郡を歸して。かうさんしてのく。

同太香之拾萬余にて。おぐちがくでんに陣取給へど。相國様ハ雜兵七八千にて。こまき山へあがらせ給ひ而。相陣をとらせ給ひ。十萬余之人數に手ふ出しをさせ給ハず。あまつさへ三萬余打ころし給ふ。是を見る時ンば。御普代衆おさへ。召寄させらせておかせらせ給ハゞ。萬に御きづかひハ有ましけれ共。御普代の衆といへど。かゝる見をそくめて。あはく事ハ。是ハ何事ぞ。他國衆ハ只今。世がおさまりたる故に。御ふさう被成而。御普代衆おバ。とざまに召はなされ給ふ。御代ハ五百八十年目出。しせん何事もあらバ。他國衆ハ。御目を日比かけらせ申さるとハおもハずして。こと〴〵くかけおちをそ為し。それのみならず。只今も左様に可有。御目をかけらせ申内。ぜひ共御用に立可申とハ思ひ申なけ共。御意をそむき御とがおを。御かけなくハ。そむめる心有而。御かたましけなく候間。御用に是非共立候ハんとおもふ人ハ。一人も有ましき。又御普代衆の。御てうなふハ。召はなさるゝ人之儀ハ不申及。ざい〳〵所々に有而御存知なき衆迄も。むせ來り而御用に罷可立。然時ンば。ちんどくくちになまくして命をたはらうやくくちにがくして身をたすくと云文有。ちんどくと云鳥ハ。海をとびたるにけ一ツをおちいれバ。か

(評)三河武士ノ骨相風采宛然見ルカ如シ試ニ彦左チシテ幕府末路ノ旗下ノ士ヲ目セシメハ將タ何ト云ハン

●いさいけトハやさしきノ意かもやらしき也

こび〳〵あのやう云々ハ媚離ノ様カ又小クキマリタル者チ(コビツチヨ)抔云フ

間ノ下ツチ脱カ

いちられしやうるいと〳〵しそる成。是ハくちにあまきあり。然る間。をろかある物之。わしか御ざき事を。しうをそうさんために。いはくしくして。おごふめて。心にたのむをしと心得而申せむ見へにいる。まつそのごとく。他國之衆ハかう儀ハよし。くちハしやうず成。御やうかうハよく申成。召使ひ申されよたまへに。御心をゆるさせ給ひ而。御ひざもとちかく召使ひ申され候事ハ。ちんどくの。くちにあまきがごとし。又ハ御普代衆ハ。相國様之御代迄。山野に伏而。夜ひるかせぎかまりをして。武邊を家として。やりさきをとぎ見がき。矢之弥を見がきて。てつぽうを見がきて。武邊をむねにたやさずして。此道をかせぎたる衆之。孫子にて候へバ。祖父親之。ぶこつ成をゆるを。生おち寄見付けて候へバ。上方衆のやうに。いさいけらしきこゑ使ひをして。こび〳〵あのやうに。出立而。けいせくを云事ハ罷成間けま共。しかしあかふおそらくハ御用にさち申事においてハ。御普代衆に上ても事ハ。おそれながら日本にハ有まじけま共。只今ハ御用使くハ御國をおさまりて。天下不入成う〳〵。いらざると思召て。御普代衆にハ。御とむがけも不被成候う哉。殊更案祥御普代。山中御普代。岡崎御普代之衆之をへ〳〵おバ。一しや御目にをい

まきざしハ脇差ノ刀

味ノ下カタチ脱カ

引つもハ先例モアリト云フ意

れ給ハざる御事ハ。らうやく〳〵くちによかきごとく。然共らうやくハくちにがけま共。やまひをしずる。御普代衆ハぶこつ使よて召使ひ申され候てと。もどかましく思召共。御まきざしと思召。御心おきあく。ゆる〳〵と御心をもたせ給ふ御事ハ。御普代衆に。こ寸事ハ有まじけま共。左様にハ候ハで。とざ法にて召使ひ申され候へバ。かたみをそくめて。各々御普代之若き衆ハあり〳〵。他國衆ハ只今ハ。御座敷にてハ。御用にたゝんと云而。かさぎぬにて。めを使かせ而あり〳〵共。取ためて之御用にハ御座敷之上にて。かゞ見たる御普代衆によハ。中〳〵思ひをよらず。成間敷。昔之引つを有。諸國之らう人が。濱松へ出來り而。御普代衆よをまけ間敷。是非共よ御用よ立而。御旗之御先にて。打死を可仕候とまことしやかに。かうげんおきふしけまバ。上様をさもやわふんと思召。又ハ御普代衆を。げよをもと思ひ而。まけまじとかせぎなれバ。御普代衆を。一度越たる事もあし。其故。味ケ原にて。御合戰よ打まけさせ給ひて。既に遠江三河をあぶあく思召候う時ハ。日比。かうげんきふして有。諸國之諸らう人ハ。かけおちをして。一人ものこらずして。三河遠江之者斗有而。御用に立而。御うんのひふかせふまける。か様成引つを候へ共。其儀を御存

一名ハ一家ト同シ
三てうれ物の本トハ即此ノ三冊ノ物語ノコトナリ

知なくして。上方衆を御なさう被成。御心をおかせられ給ひ而。御身に成。御普代十代之衆のそへ／＼おハ。御とむかけもなし。御普代衆をはなしめおかせられ給ふなれハ。日本國者打かゝる共。百萬騎にてよせくる共。御普代衆五千を一萬も可有が。上様之御先にて。しころをかたふけてかゝらはならバ。何かハさめん哉。御普代衆をなしく被成候とハ。上様之御しつはいを御存知なきなり。清康様。家康様なとハ。御普代之者をたいせつに思召而。弓矢八幡。普代之者一人にハ。一郡にハかへましきと。御意被成ける間。なみだをながして。かたじけなしと申而。かせぎけるが。只今ハ御普代之者を御存知なきとて。なみだをながしける。うらとおもてのなみだなり。是迄ハ。何れも御ちうせつ被成候う御普代衆。又ハ我〻共の儀成。さて又。子共ともよく／＼きけ。此かき付ハ後之世に。汝共が。御しうさはの御ゆふひをもしらず。大久保一名之御普代久敷をもしらず。大久保一名之御ちうせつおもしらずして。御主さまへ御ぶさうかうあらんと思ひ而。三てうれ物の本にかきしるすも成。何をも大久保共やとの。御普代衆ハあまた候間。たつ之衆之事ハ。是にハかきおくましけ共。ふでのはいでにあふ／＼かきおく成。各々のハ定而。其家

ケノ下れヲ脱カ
なノ下かヲ脱カ

く／＼にて。かきおかはべけバ。我〻ハ我が家之筋をくはしくかきおく成。まつ御地行不被下とても。御主様に。御ふそくに思ひ申な。くはての生合成。然とハ云共。地行をかなふず取事ハ。五ッわれ共。如此に心をもちて。地行をのぞむべからず。又地行をえとらざる事を。五ッわれ共。是おハなをかつへてしする共。此心をもちをもはべき成。第一に知行を取事。一にハ。主に弓を引。べつぎ。べつしんをする人ハ。地行おも取。すへもさかへ。孫子迄もさかはと見へたり。二ッにハ。おやがりをして。人にへつらひをする者が。地行を取ど見へたり。三ッにハ。かうぎをよくして。御座敷之内にても。立まはり之よき者が。知行を取と見へたり。四にハ。さんかんのよくして。だいくはん見なり之付する人が。地行を取と見へたり。五ッにハ。ゆくゑもなき。他國人が。知行おハ取と見へたり。然共知行をのぞミて夢／＼此心もはべからず。又ハ。地行をえとらざる事。第一にハ。一普代之主に。べつぎべつしんをせずして。弓を引事なく。ちうせつちうかうをなする者ハ。かならず地行おハ。えとらぬと見へたり。すへもさかへず。二ッにハ。武邊之する者ハ。知行おハえとらぬと見へたり。三ッにハ。高儀之なきぶてうやう成者が。地行おハえとらぬと見へたる

り。四にハ。さんかんおもしらざる。年之寄たる者ハ。地行おバゑとらざると見へたり。五ツにハ。譜代久敷者が。地行おバとらざると見へたれ共。たとへバ。地行ハゑとらで。かつへ死ぬる共。かなふぞ〳〵夢〳〵。此心をもちて。一ツをもてぞしても候かし。でんくわう（電光）。朝露。石火之。ごとく成夢之世に。何とぞとせい（渡世）を。おくれむとて。名にハかへたきか。人ハ一代。名ハ末代成。子共どもよくきけ。相國様迄ハ。一名之者共おバ。御念比に被仰候るに。只今ハ何の御とが（咎）に寄而。大久保一名之者共ハ。かたみをもくめ。せうかを立ておりきす事。さら〳〵ふしん（不審）もれ不申。信光様寄此方。今。當將軍様迄。御九代召使はされ給ひしに。我等共が。先祖。御代〳〵様へ。一度そむき奉りたる事をなし。其故。清康様之御時にハ。案祥斗もたせふを給ひける處に。我等共が祖父が。山中の城をちやうぎをして。取而進上申成。其寄山中衆が御手に入而。山中御ふだいと申成。廣忠之御やうせう成によつて。眼前之大伯父にて御座有。松平内前殿押領して。廣忠様を。岡崎をたて出し奉せ給ひし時。伊勢之方を御らう人被成候へて。もたらせ給ふ處に。十人斗を御供をして出るに。大久保一名之者ハ。御供を申ならバ。廣忠様を御本意させ申奉る事成がたけれバ

せんやうに成而。御跡にとゞまりて。是非共に。一度ハ岡崎へ入奉らむやと申而。御供をせずしていたり。其外之御普代衆にも。其存分にて。とゞまる衆をおゝかりける處に。内前殿の仰にハ。廣忠を岡崎へ入申さん者ハ。大久保新八郎寄外有間敷に。新八郎に。入申間敷ときせう（起請）をかき候へとて。伊賀之郷八幡之御前にて。七まいきせう（起請）をかゝせけり。其故にても。とかく新八郎寄外有間敷とて。又伊賀之郷の八幡之御前にて。一度ならず。二度ならず。七まいきせうを三度迄かゝせける。其時。新八郎やどへかへり。おとゝい共物をきけ。上様を岡崎へ入申まじきと。又七まいきせうをかゝせたり。殿様を一度御本意させ申さんためにこそ。御跡にのこりたり。其心なくハ御供をこそ申候けれ。七まいきせうの御ばつとかふむりて。此世にて。ひやくらいこくらい（白癩黒癩）のやまひをもうくむれ。又ハせがれを八ツざし（串刺）にをさゝバさせ。女房を牛ざき（牛裂）にをせむせよ。らいせ（来世）にてハむけん（無間）のすみか（住家）とをなるべけれ。是非共一度ハ入申さでハおくまじきと申而。我等共がおぢ（伯父）。我等父などを引つれて。又ハ林藤助。八岡甚六郎。成瀬又太郎。大原佐近右衛門。なとを引入。其まゝ廣忠を岡崎へ入奉る事を有。又伯父ご様之九郎八殿御なつしん之

にノ下いヲ脱カ
又ハ流カ

時ハ。我等親の甚四郎と。同弟の彌三郎と両人して。九郎次殿御家中をくりまり而。くちをもきくやどの者を。ことごとく岡崎へ引付ケせバ。九郎次殿御腹をさゝせ給ひ而。大久保一なかい之者の。女子を一人何共して取て。とり付にかけ度と被仰候事も有。又有時ハ。御普代衆ことごとく一騎をおこして。御敵に成而。野寺。佐々木。土ろ。とりさたに立こもりて。相國様へさび矢をいかけケ時も。我等おぢの。大久保新八郎なしき城をもちて。ことごとく御敵をケせな。よだか敵之城へ七八町十町斗をだてゝ。日夜さゝかひける。其時ハことごとく御敵をケせな。其一國一城之やうなれ共。大久保一なか共が。御味方ケさる故に。御うん之ひらかせ給ふ。其時土ろ。とりさたを打あけて。大久保共之有ける。上和田へよせかくなか。其時正月十一日に。大久保五郎右衛門を。同七郎右衛門を。一度に目をいふせける。ことごとく手をおハざるハなし。其時上様。人一むんにかけなけさせ給ひて。既のまいせんと被成ける處に。大久保次右衛門がとしまり付奉り而。御馬之くちを取。御跡を御らんせよ。されを。なゞき不ケとて。とゞめ奉りケ時。汝共がおんおバ。七代御わすれ被成間敷と。被仰し御事も有。おとゝい共。しんるいるとて。もとて供の。かせぎケ儀ハ。ケなくしがさし。我等おぢも打死をそる。いとこ供を。おゝく打死をして。御ふうかうケ。又ハ。我等が兄を三人打死をして。御ふうかうにケ上。又ハ我等を十六の年寄さかいめに。十二年罷有り而。御ふうかうケ上。其内四五年を。まくらもとにぐそくをおきて。中夜野に伏山に伏。しむのもかやのもをおりしき而。かせぎかまりにくろうをそる。然共ぶきやうにを候う哉。なゐに武遊之せず。又有時ハ石川ふうき守きやくしんのして。太香へ引のきける時ハ。大久保七右衛門ハ。信濃之國。こもろに有ける。ふうき守がなつしん成に。七郎右衛門にハいそぎ罷上候へと。おり付く御ひきやく之立共。七郎右衛門かくごをもつて。信濃をおさめ給へバ。只今叓元を引もらいケ者なるバ。信濃ハ御手に入間敷と思ひ而。立かねさる處に。重ゝ之御なかひなれバ。其儀ならバ。たれぞのこしおかんとて。たれおりてくれよ。かれおりてくれよと頼候へ共。ふうき守のき候ゆへハ。上而も打死をそなし。又叓元に有り而も打死をすなし。然る時ンバ。女子共ハ何と成さるをしらずして。とゞまりケ事思ひもよらずとて。おふんと云人一人もなし。其儀ならバ。御ふうかうハ何れも同前成。平助是にて打死をしてくれよがしと被ケ々れバ。彦左衛門ケハ。何れも御ふうかうと承る。

同御やうかうなふハ。罷上而御目の前ニての打死ハ。御目ニ見ゆるし。爰元ニての打死ハ同打死なれ共。まく(幕)之内之打死。人をしるましけれバ。せんをなし。罷上而。御旗先ニて打死を可申。其故母と女房を。頓而やうき守足の下ニおきて何と成さるをもしらず。母之儀ハ御貴殿と。次右衛門。權右衛門ニも母なれバ。わんだる事なし。女房之行衛をしらずして。是ニ有所ニ有らずと申れバ。七郎右衛門申ハ。尤之儀成何かをいらず。其方おとゞめおり旅バ。爰元の衆を心とまらずと申儀ハ。尤なり。御さめニ立侍る命と云。又ハ我等ニ命をくれ而。是ニわれがしと被申候ニ付而。共儀ならバ尤之儀。是ニ可有。早〻御上われとて。のがせける。然間上方ハ見ざれ而。七郎右衛門こそとりわへだニ。上さると云而。爰をかしてもそゝめきけり。然る處ニ。信玄(ゲン)之御子ニ。御せうどうどのと申而。御目くら子之一人。越後の國ニ。(景)影勝之かゝゑておき給ふが。其御父子を甲州へ入奉ると申而。さゝやきける。か様之時を。ゆくゑをしらぬ他國へ。十日(路)地行而。人のいかねる處ニ。命をすてゝ御やうかう申上候う。然共やうき守させるくせ立もせざれバ。おのれからしばまりけれバ。何事をなし。それのミならずして。さなざなつきん之時。御せいぜい

此ノ下レテ脱カ

として。人數を一萬余指被越候う時。おしこ見てかまひをやぶりて。のきわし(退足)ニ此かれて。せいぐんしけるニ。四五町之内ニ。三百余打せけれバ。早さうくだわらん時。金ハわむそれ。てうれ(蘇)せ(羽)の指物ニて。七郎右衛門が賀ゞ河をの里越而歸(返)す。七郎右衛門ニ此ゞいて。彦左衛門が歸(返)を。七郎右衛門ハかせらニてかけまされバ。指物を見て。七郎右衛門所へかけよせける所ニ。旗おをおしよせける。彦左衛門ハかせらニて。此きふせ而。頭おバとらずして。上之だんへ押上けるニ。彦左衛門ハ銀之上羽のてうれ羽を指たれバ。そせを見て。十一二人參りされバ。七郎右衛門ハ。かせらをもちこさゑる。彦左衛門ハ。上のだんをもちこさへさるゆへニ。さうのせいぐんハ。しばまり(鎮リ)さり。然ずンハ。せいぐんして。四五里の間おひ打ニ。打せ可申けせ。のこりさるとても。五千を六千を打レ可申を。第一ハ七郎右衛門が歸しさるゆへ。次ニハ彦左衛門が歸さるゆへニ。五六千之人數をさそけて。御やうかう申上さる事も有。又各々ちかき事なれバ存知さり。僞とハ申間敷。今度大坂ニおひて。相國様御旗奉行衆。うろ〳〵としさるを御腹立被成。旗ハにげさると御意之時。御きニ入申とて。中〳〵御旗ハ何方ニ御座候お不存と申上〻れバ。其付而。いニ

御ひけ之事ハ御卑下ノ事ナルヘシ

キノ下立チ脱カ

しへハさらり取て。一人としてもならざる者を。御取立被成。一を二をおく御出頭を申衆さへ。上様之御ひけ之事。御きに入申とて。御旗おバ。我等を見不申と申上ける。たとへバくばれ申御旗成共。御旗を立申さるとて御意にそむく共。御主様をおもい奉らハ。立申と申もふすして。かなはざる處を。御主様の御ひけをもいふず。とうざの御意之よたやうにと申事ハ。御取立之衆にハさんぐへの事。以來之御用にも立がたし。然る處に。彦左衛門に旗ハ。何とさるると御意之時。御旗立ハ申さりと申上なれバ。御けしきをかへらせ給ひ。たゞ見のむかいの處りを。御ふまへ被成而。御杖にて。たゞ見を突かせ給ひ而。旗をバ見る共を見ぬと云やどに。立間敷と御意成に。彦左衛門ハこあさの處りに手を付なれバ。間ハ二しやく余有りけるが。かうべをたゞ見に付而。御旗を立申と申なれバ。我を見ぬ程に立間敷。何と御意成共立申と。申上なれバ。歸シ而さつ間敷と。おふき成御てしにて。御杖にてたゞ見をつかせらし。御こしの物を。ぬかりまゐらせ給へども。そしにをおとろかず。何と御意成共御旗なすと。申もし而。杖いにハ。すかちな御間。御旗ハくばしざるに成さり。我等が。身上の事を。各々れ用に思ひく。そのぐへのとくに。御せる

七郎右衛門者チ使ヒシトハ七郎右衛門ノ家來チ連レトノコナリ

ハ立不申と申上候ハヾ。さながら御旗ハくばしさるに可成。然る時ンバ。日本に其かくれ有間敷なれバ。異國迄も。其ひゞき不可然。我等が。かうべハむらし申共。御旗にさずハ付申間敷。たとへバ。くばれ申共くばれ不申と申上而。御せいもんに合可申に。いまんやくばし不申御旗に候之間。おそれながら御ことどを歸し申而。申もりさるに寄而。御旗のくばれざるにしさるハ。我等がかふかい申さる故成。是ハ御ならうかうにハあふざるや。それのミあふず。七郎右衛門に付て。さかいめに十二年いさるに。七郎右衛門者を使し。七郎右衛門名代に。此方彼方の取出之番を。其せうに成而。使とめさる者ハ。只今迄のこりて有者ハ。御普代衆の内にハ。我一人寄外な有間敷。尤其比之。取出之番をしさる衆も可有なれ共。其衆ハとくぐく人に付而。有きさる衆ハ可有。人を使れ而ありきさる人ハ一人も有間敷。我斗にて可有を。我等をバ。しんらうくらう申上さるとハ思召なくして。其比人之内之者に成而。其主人に。ふちきうをうけて。さう里取一人之ていにて。其しう人しならうかう申さる者おバ。若き時しんらうくらうして。もしりまゐりさる由御意にて。くゐぶんに御知行被下ける。それハ。其身の主へのならうかう成。上様への御なう

しノ下リチ脱カ

かうにあらず。其を御ほうかうと思召候へど。其しゆうへの御ほうかうはなし。我等はさ
かいめへ出ると申せ共。親之跡と。兄之親藏打死之跡を。被下而あれバ。七郎右衛門處寄
は。何にてもとらず。若き間は。御手がらを心がけて。我がのぞみにて出たり。其故。七郎
右衛門をさかいめに召おかれける間。方々以。さかいめへ出て御ほうかう申上候成。人
なみにしまい申事は。一々にわらはしてもいらざること成。おもしろき事共成。御し
きに御知行被下而。さかいめへ出て。御ほうかう申上さる我等共は。しんらう共思不召
し而。主をもちて。其主の共に出さる者おバ。さかいめに有而。しんらうをしさるとて。過
分に御知行を被下ける。子共きゝさるか。其いはしへ。人にはかられざう里取一人にて
世をめぐりさる衆が。御前へ出。人をおほせい召つれさり。又今度大坂にて。そそうしく
をなき所にて。にげさる者が。過分にかさね知行を取而。人をおゝく召つれて。なふおし
にわりく。我等共は。又武邊しさる事もなし。猶〻にげさる事もなし。せんぞの御ちうせ
つをきりもなし。又我等しんらうをきりもなし。御主様には。當將軍様迄御九代之御普
代なれ共。か様に被成而。をかせらる候へバ。右之衆が。人おゝくにてとおれバ。りきへの里

●トチノ實ホドノ涙ト云フナルベシ。

よせてとおる時は。さりとは御なさけなき御事かなと思へバ。人しれず。大とちのせい
成なみだがこら〳〵とこぼれ候れ共。何のいんぐわかなと思ひ而。心と心を取なをし
てこそわりき候へ。さて〳〵御ほうかうは。見にあまるほど申上申成。上様御座被成候
御方へ。おとをしてふしさる事もなし。朝夕之かんきんなを。先しやか佛をおがみ奉り
而。其次に相國様をおがみ奉り而。其次に。當將軍様。御しゆみやう御あんおんに。御ぞ
くさいに。御子様。御兄弟様。何をも御そくさいに。御しゆみやうあんおんなと。おかみ奉
り。其後七世之父母二親とをおがみ奉り申。か様成儀は。當將軍様は御存知なき御事。東照
ごんげん様は見とおさせらるを給ふべき。か様に大事と存知奉り申儀おバ。神佛を見
とをさせらるゝ様はいん。おもへバ世もまつせに成而。神をまもさぬかと思ひ奉る成。
然共子共よくきけ。只今は御主様之御かうしけなき御事は。もふとうなし。さぞめて汝
共を。御かうしけなく有間敷。其をいかにと申に。他國之人を心おきなく。御ひざもとち
かく召つかはされ。又は何の御普代にをもあらざる者を。御普代と被仰而。御心おきなく
召つかはされ。汝共が様に。御九代迄召つかはされける御普代をバ。しんざん者と被成

三ノ下百ヲ脱カ

御こんがうトハ御金剛ニテ草履ノ事第一卷ニアリ

御馬取ハ馬ノ口取ノ事ナリ古書ニハ所々ニ見ユ

而。斗立の三斗五升俵之。三年米を。貳百俵三俵ッヽ。何をもに被下而。何とて不存知可奉。然共。其儀を御ふそく(不足)に存知奉ふで。よく御ほうかう可申上。御こんがうをはき申と。御意なふバ貳百俵之事ハさておきぬ。貳俵不被下しても。御ざうり取に成トモ。御馬取成而モ。御家を出てたつ之主取有間敷。只今こそ。我等先祖(センゾ)をもてさせ給へ。信光樣寄此方。相國樣迄。御代〻の御なさけ申すれずして。只今之。かなしき事おバ。信光樣寄御代〻。相國樣迄之の御ほうかうと思ひ奉り何とやうにを。御ほうかう申上奉れ。其故御主にそむき奉れバ。七逆歳(ギヤクザイ)のとがをうけて。ぢごく(地獄)におちる成。此世ハかりのやどり成。後世を大事と思ひ而。返〻も御無沙汰なく御馬取に被成候共。御やりもちに被成候共。御意にもまき有間敷。御家を出る事なかれ。御普代久敷。度〻の御ちうせつ。むまれめぐりを申。御九代召はかられさる者の筋を。おしく召はかられ給ハヾ。御主之御ふそくにてこそあれ。萬騎が千騎。千騎が百騎。百騎が十騎。十騎が一騎に成共。御ざうりをはきても。よく御ほうこう申上奉き。但(タヾシ)御ほうこう申上てモ。ふせう(不肖)はふをして。御ほうこうを申上たふバ。御ほうこうになふずして。歸而。七逆歳(ギヤクザイ)之御とがと可成。何事おを。かごとお

(評)忠愛ノ至言肺肝ヨリ出ツ

(評)忠愛ノ至情此嚴正ナル家訓ヲ遺サヤラント欲ストモ得ベカラス

笛ノ根ハ喉頭ヲ云フ俗ニノド笛抔云ヘリ

を。御意次第。火水之中へを入而打わらい(笑)申て。御きげん之よきやうに。御ほうこう申上奉れ。親。兄弟。女子。けんぞく。一族いを取はめても。かなふまじく返〻。くりかへし〱御主樣御一人にはかへ申な。御主樣之御ほうこうなふバ。右之者共おバ。火水之中。又ハ敵かたきの中へを。打もてゝ。二度其さた(沙汰)もすな。其さたをしたる物なふバ。くやみ(悔)さるに。似なみきバ。かなふずさたもせぬ事成。此おもむき汝共が。子共によく申はさへよ。是をそむきて。御主樣へ御無沙汰申上さる者なふバ。我して(死)しりと云共。汝共がふゑ(笛)のね(根)りくひ(喉)付而。くひころすべし。かくハ申せ共。只今御主樣に。御忝御事ハ一ッを半分もなけれ共。信光樣寄此方。御代〻。相國樣迄之御なされしを。我等之代〻。ふかくかうむり申。それへの御ほうこうと申。當將軍樣迄。御九代之御主樣と申。又ハ我等之代〻。御ちうせつを申上さるを。今そへ之代に御無沙汰申上たふバ。我〻代〻の御ちうせつが。む(無)と可成間。其儀をむなしくなすまじきため。其故。御主樣に。ぎやくしん(逆心)を申せバ。七逆歳(ギヤクザイ)之とがをかうむり而。无間地獄(ムゲンヂゴク)におつべくれバ。是等之おそれのをそろしくれバ。返〱も御主樣にそむき奉り申な。よく〱心得可申。然共當せい(世)之衆ハ。地獄(ヂゴク)へをる者

（評）當時ニ於ケル軍人精神教育ノ根底ヲ概知スヘシ此精神ノ涵養内ニ充テ而シテ實戦ノ練磨、外ニ積ム兵何ニ因リテ強カラザラン戦ヒ何ニ因テ勝タザラン養兵ノ局ニ當ルモノ茲ニ鑑ミハ必ス大イニ得ル所ナラン

あ姿。何のごせうと云人をおゝし。然共ぢごくあきと云人ハ。主親をも。何共。思ふまゑけきバ。主之様ふを立まゑんきも。左様成人よハ。わつたふ地行くれても。せんをあき事成。地獄が有と見くてこそ。主ふそむけバ。七逆歳之とがをからむりて。無間地獄ゑ。おはるをうあしミてこそ。御主をバ。一しやおそろしけき。又親ふそむけば。五逆歳のとがをううむりて。無間地獄ゑおちて。よるひるくをうける。其くるしミの。おそろしさふ。御主と親おバ。大事よして御意よそむうさるやうよと。人間ハたしあめ。地獄を極樂をあきと見さふバ。主のむちも。おやのむつをも。わさふぬと見なき間是をおもへバ。左様ふ申人ハ。御主様之御事おも。思ひ申まじきハひつぢやう成。うまへて〱。子共よくきけ。地獄を極樂も有よハひつぢやう成ぞ。ぢごくふ。かならずおそれて。御無沙汰申上申あ。御召はうい候事も。あしく共くせこの。生合。いんぐせと心得而可有。然共因果ハ色〱よ有と見へさり。よき事をしても。よくハむくハで。あしきも有。あしき事をして。そへがさりへて。よたを有り。あしき事をして。其身之代ふ。あしくあさるも有。色〱とハ見へさり。其をいうふと云ふ。御主様へ敵をして。さび矢をいうけ申さる者之。そへ〱のそんぢや

ヨノ下セチ脱カ

うして。さうゆるもおゝし。又代々御敵を不申上して。矢をもてようけふさぐりて。御代々の。御時ごと御ちうせ杦を申上さるそへ〱れ者よ。こと〱く。うさ見をそくめて御敵を申さる筋之者よ。かゞむ因果を有。我等共の因果ハ。此因果成。さて又。信長あどの因果ハ。たちまちふむくせ給ふ。其をいうよと申よ。ミのゝくよワ。岩もろ之城よて。甲州衆を責をとさせ給ひ。二之丸へ押入。坑をゆひ而。こと〱くやきころし給ふ。其後甲州へ亂入給ひし時。ゑをん寺のちしき立。其外之出家立を。しゆらふどうへ。おひ上而。火を付而。こと〱くやきころし給ふ。比ハ三月之事成よ。其年之六月二日よハ。あけち日向守ゐつしんして。二条本のふ寺よて。やきころされ給ふハ。因果ハ早くむくひさるうと見へさり。さて又。太香之。關白殿御ゐつしんとて。腹を切せ奉りて。御手うけ衆を三十人斗。何きをきく〱之衆の娘立を。三町うせふへ引出し而。頭を切而。一ッあゐへ取入而。ちくせうぼうと名付而。三町よはうを付給ふ事を。因果。又三七殿ハ。信長れ御子あれバ。太香之ためよハ。主よて有物を。ぬまのうつ見よて。御腹を切せ給ふ事を。因果成。昔ハをさだ。今ハ太香成。又。家康様へどくをまいらせんと被成けるふ。座敷ふて御しき第

●ふぐれてハ解散ノ意也俗ニふごれてト云フ

きおひハ古書競ニト見ユうへハゆへナラン

を被成而。御座敷が。大和大納言の。上座寄。下座へ御さがり被成候ゆへに。其御せんが。大和大納言にそむりて。太香の舎弟之。大和大納言。まいりて死給ふ。是と申も。相國様。御しひにて御せうじき故に。天道之御目ぐミふかくして。不被参。大和大納言之。参りるも因果（インクハ）成。其後秀頼之大坂にて。相國様に。御腹を切せ奉らんと。有りけるも共。ふぐれてあふさる事なれ共。御しひ故に。秀頼をたすけおかせらるも給ふ。其後又。諸大名をかたらひて。伏見にて取かけて。御腹を切せ申さんと。もつぱらしたくをしけれ共。思ふをよらずあふざる事なれバ。打過ぬ。其後わひば陣へ御出馬之御跡にて。諸大名をかたらひ而。手を出し而。伏見之城をせめて。やきくずし。各を打取而。其後おひに。關ケ原へ押出し而。合戰して。打まけける時。御しひかへ。たすけおかれ。それのミならず。いおりに大坂之城におかせらるも給ひけるに。其御おんをもしらずして。今度又。諸國之浪人を。拾萬に及而。かゝえて。御敵をなし給ふ所に。押寄させ給ひ而。城を取また給へバ。又かうさん之しけるバ。こりさせ給はで。御しひのふかきゆへに。ゆりさせ給へバ。又次之年。手出しをして。坂井之町をやきそらへバ。又〳〵兩將軍様。御出馬有りて。をひくずさせ給ひ。あてぎりに被成候へバ。雲のもへかや。町も。城も。一間ものこらぞ。二時之内に。やけそらいたる。天しゆに。火がかゝりたるバ。秀頼ハ。御母を打はれさせ給ひ而。山里ぐるわへ。出給ひ而。又かうさんをこひ給へバ。御しひにて。御しあん有けるが。いや〳〵又いけておくあふバ。又をやふかくご可有に。腹を切せ申せと。御意なれば。押かけて腹を切給へと申せぞ。火をかけてやけしに給ふ。是と申も。太香之因果（インクワ）。又ハ御とがあき相國様へ。度々に。をひてそむかせ給ふ因果（インクハ）成。是を思へバ。因果と云事も有物か。さて又。相國様之御しひハ申不及候へ共。あふ〳〵如斯。まつ〳〵御敵をなしてさび矢をいかけ奉り。御命をねらいたる者共を。こと〳〵御たすけ被成候御事。さいげんなし。又ハ尾張大ふの。太香に。せめほけらるも被成しと有時。家康を頼奉と仰けるに寄。御家せいに御出馬有而。合戰を打勝給ふ所に。大ふハ。太香にかたらふもも。家康へハ。さたなしに。ぶちをはくりて。あまつさへ。家康を打奉らんと。内々たくミ給へど。何共打可奉様之あらざれバ。程ものび行たる處に。太香寄。大ふハ。ぶちをはくらせ給ふが。家康ハ何と可被成」同ハ。御ぶちをも被成候へと。仰被越たれバ。大ふにたのまれ申せばこそ。ぶちにをいさゝ給。さふバ

せノ下いチ脱カ

ふぢにすとて。御ふぢに成然時。後。大ふハ。太香に。國をとらせ給ひ而。越前之かさミふ
に。あふきぬ成にて。御座候つるが。今度石田治部が。手がハり之時。家康へ御敵に成而。
治部と一身に成たるが。合戰に御かちても。御ゆるし被成而。御しひを被成ける。今度ハ。
大坂へいらざるゆへに。やくなしに。五萬石被下候儀ハ。御しひにハあらぬや。石田治部
が。伏見にて。御敵をなさんとしたりきバ。上方衆寄合而腹を切せんとすを。各をそろい
て。さお山へをくりて越給ふ。御しひにハあらぬや。其御おんをわすれて。又御敵をす而
打ころされす。佐竹。影勝。島津。あき之森。彼等が。御敵をすさるに。御せだいハなくして。
歸而。國郡を被下けるハ。御しひにハあらずや。秀頼を。四度迄ちがいめを御ゆるされさ
るハ。御しひにあらずや。信長の。伊賀之國の者をバ。何方に有をも引出し而。ことごとくせ
いだい被成たるに。三河遠江へ參る者おバ。かくしおき給ひて。一人も御せいだいな
き。是ハ御しひにハあらずや。然處に信長之御腹切せ給ひし時。家康樣者。伊賀地なかゝ
らせ給ひ而。のがせらきす時。日比之御おん御忝とす而。國中之者共が。おくりす奉り而。
とをしす。是を。日比之御しひうへ成。是を御因果之御目出度御事成。又〱愛に。ふし

汁かけハ取續チ云フ

年取ハ節分チ云フ

元三ハ正月元日二日三日トチ云フ

ん成こと之有けるハ。各々犬打ならん迄すたるハ。本田佐土守が。大久保相摸守を。さ
ゝゑすさる由をすなふミしさり。左樣の儀を人がしらで。なをなき事す。佐土ハ。相摸親
之七郎右衛門に。拾おんをうけさる者なきバ。おんをわすれて。何とて左樣にハ可有哉。
其ハ人の云なし成。相摸ハ。子の主殿をしため。我等こそにしふ孫。定而。其身之御とがも
なくこそ有らん。とても佐土ハさゝへす事。ゆめ〱有間敷とハに今おひて思ひい
れ共。町人た兄百姓迄をす故ハ。いかなれとハ思へ共こそげにを左樣にもこそありける
かと。ふしんにハあれ共。然共しれず。佐土ハ若き時分なハ。むでき物とハさゝハしされ共。
年を寄けきバ。定而其心ハなおり可す。佐土守おバ。七郎右衛門が。朝夕之むでぐミて。女
子之汁かけ。しんそたきゞないさる迄。汁かけて。むでぐミ。御敵をす而。他國へ。かけおち
しさる時も。女子をむでぐミ。其故御わび事をす上而。國へ歸して。先ぞやぶさたかぢや
うにして。其後色々御とりなしをす上。四十石之御地行をすうけ而出し。其後もむでぐ
ミて。年取にハかなわず。かれいにして大汁でもり之めしと。ぐわんざんめしおバ。七郎
右衛門處なて。佐土わくひけり。關東へ御かけ被成而も。其故にハ得戸なても。其かき

いおハまゐる。佐土なれバ。いかでか。其おんをしすきんや。其故七郎右衛門との御時を。
佐土守をよびて。ゆいごんにも。相撲にぶさたなき用にと。頼入而をて候へバ。其時を七
郎右衛門に。むかひて何とてか。ぶさた可申。御心安あれと。かたく〳〵と申たるに。若其心
を引ちがへて。さゝへても有か。昔ハ因果ハ。さらのをはをめぐると云けるが。今ハめぐ
りはやくなるに。そくにむかいへ。とぶと云こと有。に今おひて。いかあれバとハおもへ共。
人にさへはらせよと申事のあれバ。左様にも候ら哉。よき因果ハ。むく〳〵共おそへなし。
あしき因果の。あしくむくうハ見へやすなし。さも有か。佐土ハ三年もそでさすなして。顔に
とうがさを出かなて。方顔くちをておくバの見へたれバ。其儘死。子にて有上野守ハ。御
かいゑき被成而。出羽之國。ゆ里へあがされて。其後。あきゝへあがされ而。佐竹殿にあづ
けらき而。四方にさくを付。やりをやりて。番を被付而ゐたり。こなし〳〵申おくしすをげ
にハさを有か。相撲守御かいゑきを。大空す。御たいなの御仕おきとあつて。京都へ召は
かしされ跡にて。御かいゑき被成。又上野守を。御かいゑき之時を。もが見之なおき可仕
と仰被付而。召はかしされ而。其跡にて。御かいゑき被成候へバ。同ごとくに候ら故。さて

○史記ノコトバニハアラザルヘシ此等ノ語ハ道家ノ語ナルヘシ生氣養者ト云昔アリ生氣トハ十二支ノ向ヲ云譬ハ蛇ハ巳ナレハ亥ノ方ヲ生氣トスルノ類ナリ大歳トハ其年ノえとナリ子ノ年ナレハ子ノ方ナリ玉女ハ吉方歳徳神ノ事ニシテ頗梨婇女ト云フ

元本ハ此年號月日ノ下ニ寛永丙寅何トアリ之レヲケヅリテ此ノ年號月日ヲ認ム

ハ。さゝゑ申たるか。因果之むくいと。又せけんにて犬打しふんを迄申成。史記之ことばに。
蛇ハしごかまれども。なやうけのかゝにむかひ。鷲ハ太歳のかたをそむき。巣をならき。
はむめハ。はちのへ。はちのとに。そをくいなため。しうよきハ。見なとにむかひて。かた
たがへそ。鹿ハ玉女にむかいてふし候ふなり。ケ様之けぶ物ごに。ぶんになさがら心ハ
有ぞとよ。而斗ハ人ゝにて。たまなひハちくなやうに有物哉

元和八年六月日　大久保彦左衛門

子共にゆづる

若此書物を。御普代久敷衆之御覧なて我家之事斗を。なこに書たるとななた思召な。左様
にハあらず。此書置儀者。人にみせんためにあらず。我ハ早七十ニ及に罷成候ふへバ。今
明日之儀を不存候ふへシ故に今にをむなしく罷成候ふハ。いゝ御主様を何程久敷御主様

共存知申間敷くれバ。御主様にはをき奉御事・當將軍様迄・御九代之御主様にて御座被成候う儀を。我がせがれにはならせん〳〵ため。又は我がせんぞ(先祖)の御代〳〵之内。一度を御敵を不申候ふへて。度〳〵御ちらうせ候を申事を。ならせんため。又は我共のならんらうをならふせんためにはに。書置而。門外不出と申おき候ふへバ。誰人を御覧せは有間敷くれ共。若落ちば而。御覧せ候共。なてには我家之事斗書さると・仰有間敷候う。御普代久敷衆は。何をも。我が家〳〵の。御ちらうせ候のすなめ。御普代久敷筋めを。如此書立而。子共立へ御ゆずり可被成候う義は・如此。我が家之事を斗書立而。子共にゆずり申成。然る間他所之儀は書不申以上

明治二十三年十月廿四日印刷
明治二十三年十月廿五日出版

版權所有

出版　日本戰史會
發行者　武藏吉彰　東京市牛込區横寺町六十八番地
印刷者　坪内直益　東京市京橋區鎗屋町九番地
印刷所　必昇社　東京市京橋區鎗屋町九番地

다7 37

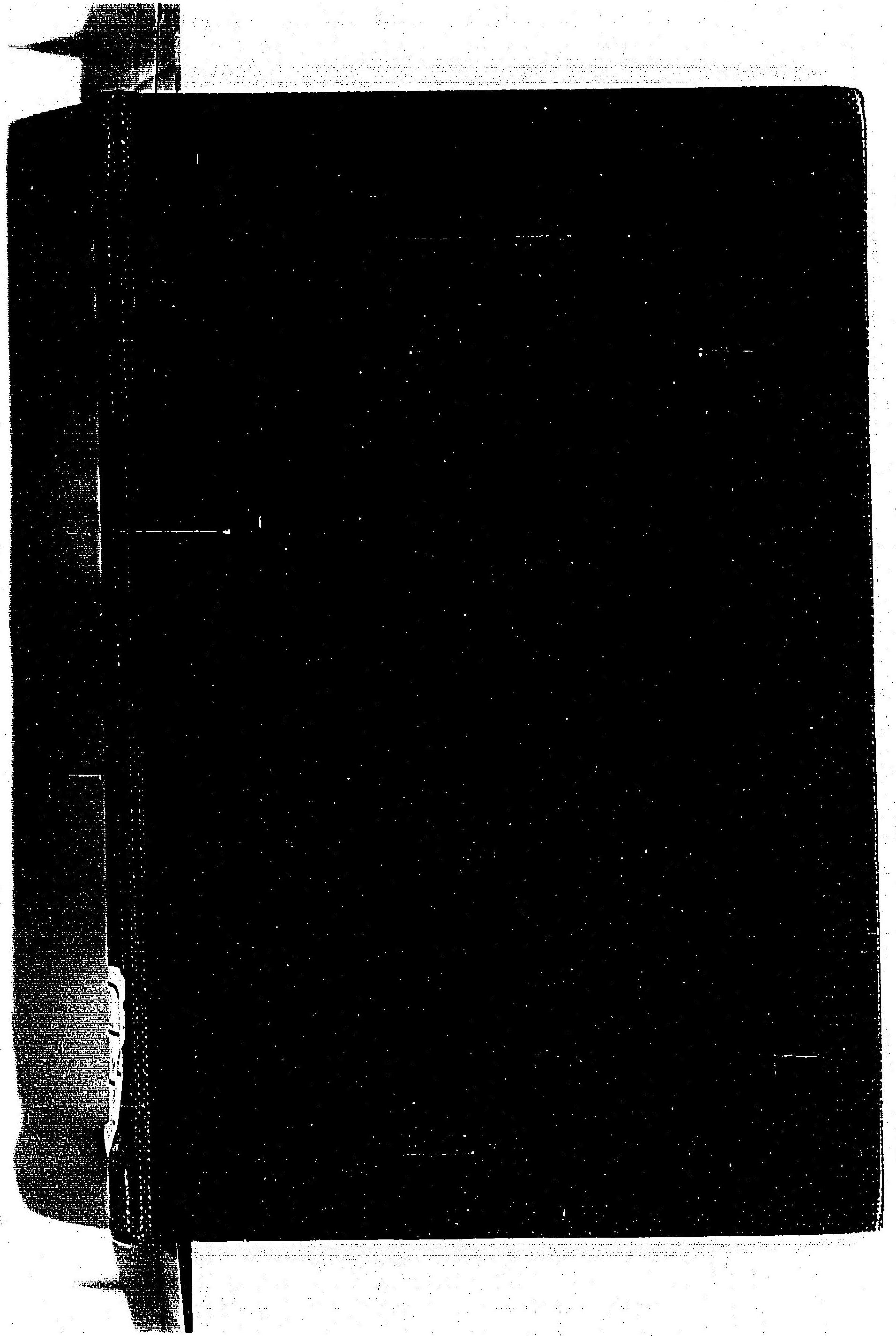
大賣捌所

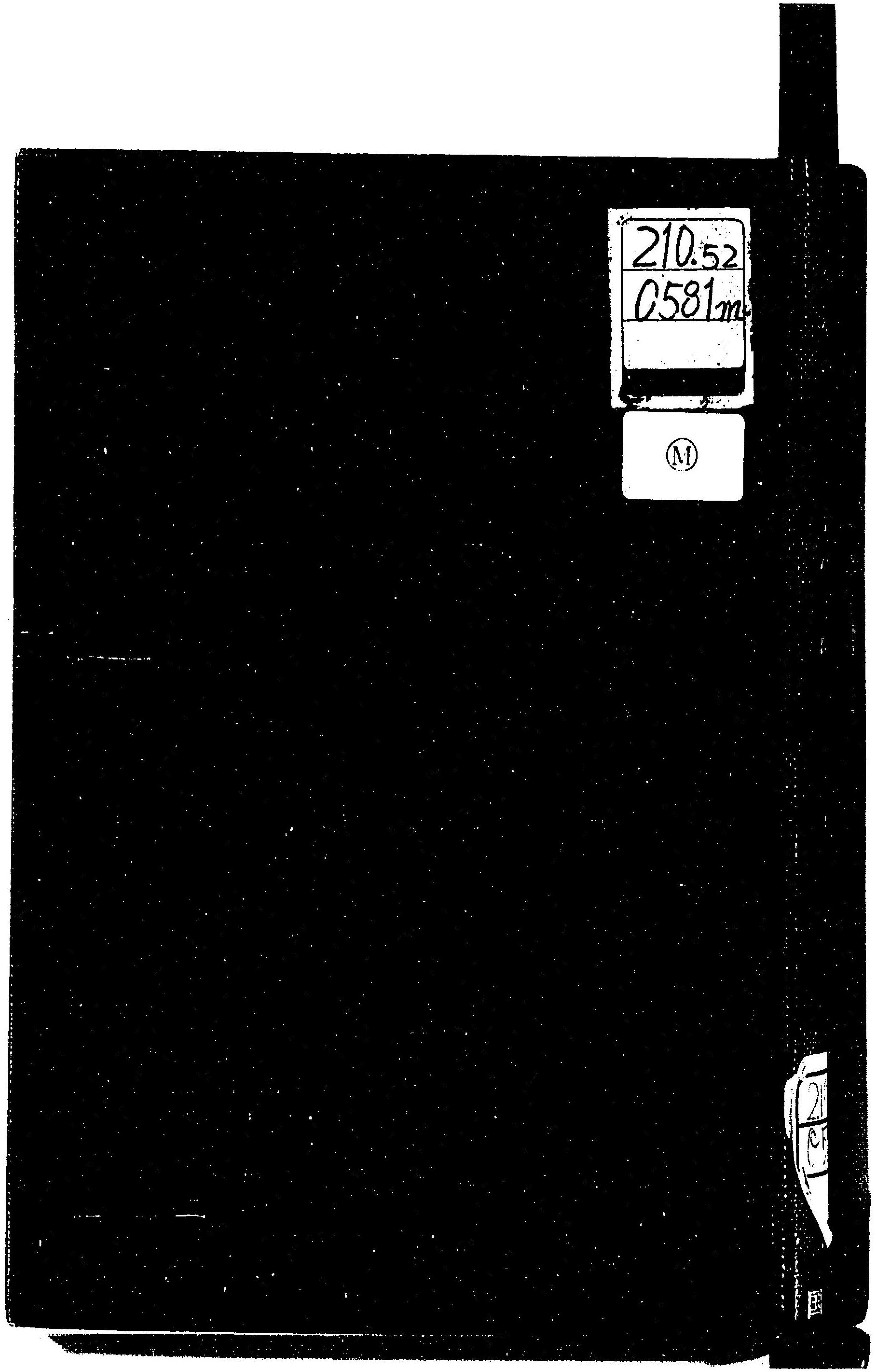
東京市日本橋區通三丁目
丸善書店

同　同通一丁目
大倉孫兵衛

同　同呉服町七番地
忠愛社書舖

同　神田區裏神保町
三省堂





002016−000−8

210.52−0581m

三河物語

大久保　忠教／著

M23

ACB−5107